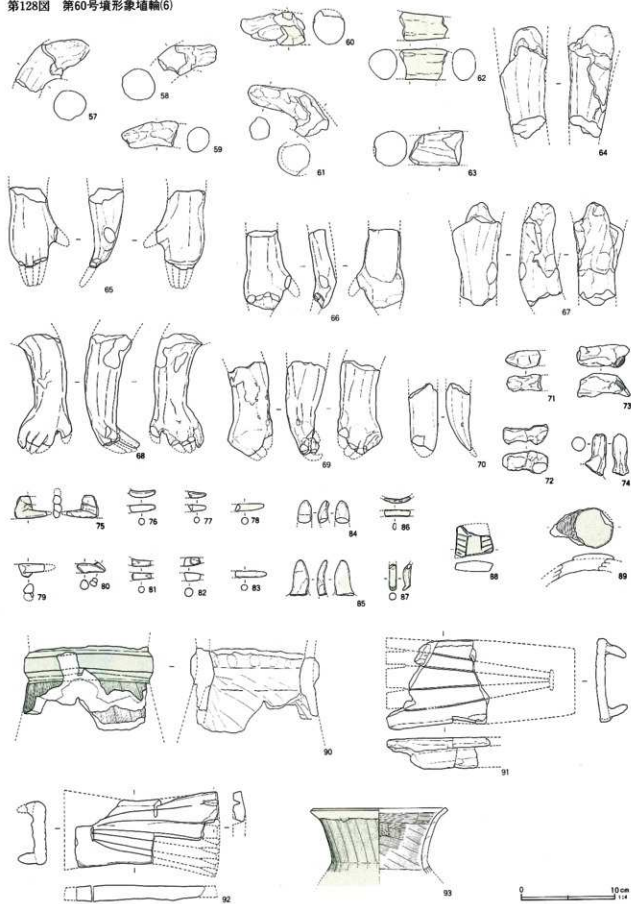
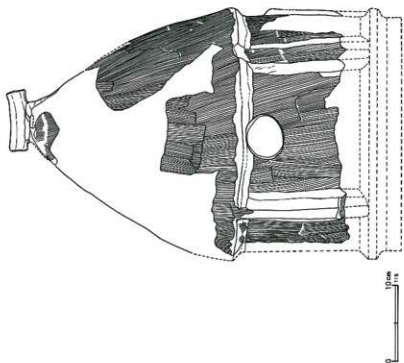
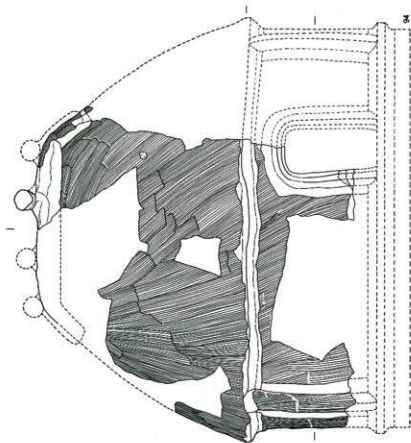
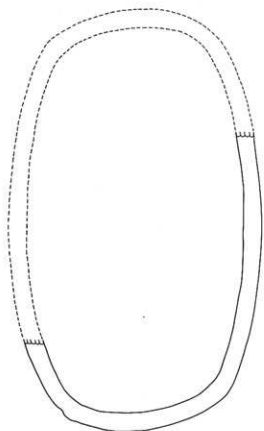
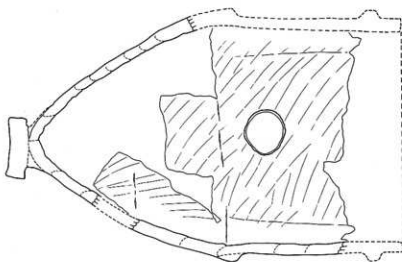
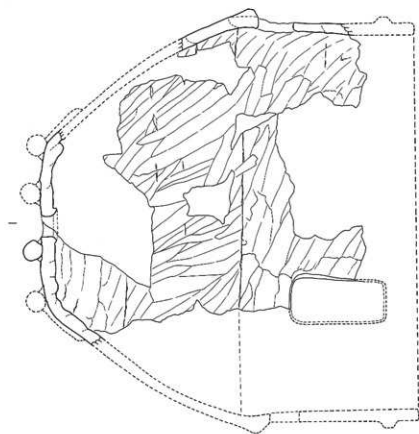
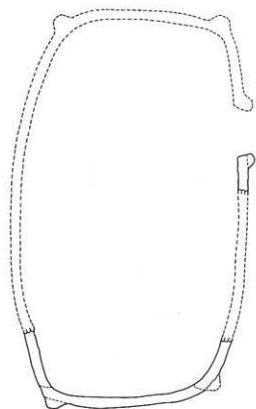


第128图 第60号墳形象埴輪(6)

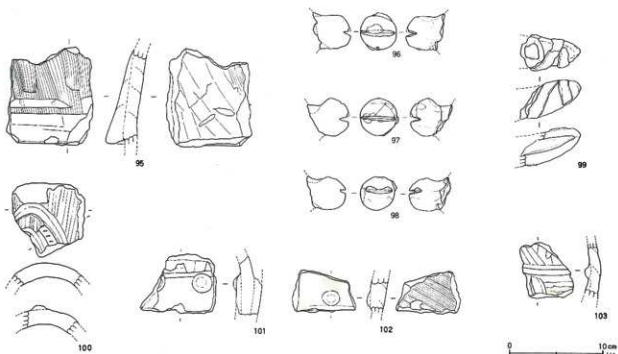


第129図 第60号墳形象埴輪(7)





第130図 第60号墳形象埴輪(8)



全高52cm、平部底部長52cm、妻部底部長33cmを測る。壁体部の四隅には縦方向の凸帯で柱を表現し、妻側には軒先に接して円孔を穿孔する。入口部は平部のやや右寄りに偏在し、長方形に穿孔され、周縁に凸帯を巡らしているが、基部がまったく遺存していないため、入口部下端の形状は不明である。屋根部は妻隠板を表現し、棟に円柱状の堅魚木を乗せる。接合した堅魚木は1本だけであったが、剥離痕から本来は4本の堅魚木が取り付けられていたものと思われる。棟の中央には小円孔が開けられている。壁体部の成形は幅5cmの粘土帯を繋ぎ合わせ、壁体部と屋根部の境に乾燥単位を示す接合痕が認められた。屋根部は粘土紐の巻き上げによって徐々に持ち送りながら、頂部で閉塞する。外面調整は屋根部及び壁体部とも目の粗いハケメ調整を行い、内面調整は丁寧にナデを施す。

第130図95は寄棟造と思われる家形埴輪の軒先部分の破片である。胎土、焼成等に生出塚窯跡群に特有な特徴を示すことから混入の可能性がある。

96～98は馬形埴輪の胸繫や尻繫等につけられた鈴

である。いずれも色調は赤褐色で、胎土に白色粒子を多く含み、混入の可能性が強い。99は馬形埴輪の尻尾である。粘土板を折り曲げて中空に成形し、外面に粘土紐を巻きつけて革帯を表現する。なお、この破片は第181図17のSD120出土例と接合することが校正段階に確認された。そのため接合した状態を図示することはできなかった。

100～103は器種不明の破片である。100は粗いハケメを施した円筒部に逆U字形の凸帯を貼付し、凸帯にヘラ先による烈点文の刺突がある。101・102は幅広の凸帯に乳房状の粘土粒を貼付したもので、外面に赤彩が残る。103は屈曲気味の体部に幅の狭い凸帯を貼付したもので、外面に赤彩が一部残る。

築造時期については、周溝覆土中にFAが堆積していたことから、築造終了後周溝が少し埋まり始めた段階にFAの降下があったものと考えられる。出土した土師器杯や須恵器高坏、甕等の特徴から5世紀後葉から末葉の築造と推定され、古墳群形成初期の盟主墳のひとつとして位置づけられる。

第60号墳出土形象埴輪観察表 (第123~130区)

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考	
1	人物 男子	AFJ	A	C	縦ハケ・ナデ	14	ナデ	壺を運ぶ男子か 顔赤彩
2	人物 男子	AEFJ	A	C	縦ハケ・ナデ	8	ナデ	二又の披り物をつけた男子か 顔赤彩
3	人物 女子	AEFJ	B	E	縦ハケ・ナデ	12	右傾斜ハケ	12 女子 髻剃落 赤彩 腰に綬を下げる
4	人物 胴部	AFJK	A	E	縦ハケ・ナデ	14	ナデ	人物胴部 外面赤彩残存
5	人物 胴部	AFJK	A	C	縦ハケ・ナデ	14	縦ハケ・ナデ	14 人物胴部 外面赤彩
6	人物 裾部	AFJK	A	F	縦ハケ	14	ナデ	人物裾部 須恵質 外面補修痕あり
7	人物 裾部	AFJK	A	C	縦ハケ	7	ナデ	人物裾部 底面掻圧痕
8	人物 裾部	AEFJ	B	E	縦ハケ	13	ナデ	人物器台部 上端部外面灰褐色
9	器台部	AEFJ L	C	E	縦ハケ	12	縦ハケ	14 基部R接合 底面平坦
10	人物 男子	AEFJ	A	C	ナデ・ハケメ	16	ナデ	男子 顔赤彩
11	人物 女子	AEFJ	B	E	ナデ・ハケメ	12	ナデ	女子 髻剃落 顔赤彩
12	人物 女子	AEFJ	A	C	ナデ・ハケメ	10	ナデ	女子 髻剃落 顔赤彩
13	人物 顔	AEFJ	A	E	縦ハケ	16	右傾斜ハケ	16 二又の披り物をつけた男子 赤彩
14	人物 顔	AEFJ	A	E	ナデ・ハケメ	14	ナデ	二又の披り物をつけた男子 赤彩
15	人物 顔	AEFJ	A	E	ナデ・ハケメ	12	ナデ	左目部分 赤彩
16	人物 顔	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	披り物をつけた男子
17	人物 顔	AFGJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	赤彩残存
18	人物 顔	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	鼻部分 赤彩 粘土塊成形
19	人物 顔	AEFJ	B	E	ナデ・ハケメ	13	ナデ	顎部破片 顎粘土塊貼付
20	人物 顔	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	7 顎部分 赤彩残存 粘土塊貼付	
21	人物 顔	AFJ	B	E	ナデ	ハケメ	12 顎部分 赤彩残存 粘土塊貼付	
22	人物 顔	AEFJ	B	E	ハケメ・ナデ	14	ナデ	顎部分 穿孔有り 赤彩
23	人物 頭	AEFJ	B	E	ハケメ・ナデ	14	ナデ	頭部破片 斑点状の赤彩 内面粘土塊成
24	人物 頭	AEFJ	B	E	ハケメ・ナデ	14	ナデ	頭部破片 斑点状の赤彩 小円孔有り
25	人物 美豆良	AEFJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良 橙褐色粘土混入
26	人物 美豆良	AGJ	B	C	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良 下端木目圧痕 赤彩残存
27	人物 美豆良	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良 外面赤彩 粘土塊成形
28	人物 美豆良	AFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良 外面赤彩 粘土塊成形
29	人物 美豆良	AFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良 両端部欠損 粘土塊成形
30	人物 美豆良	AFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良破片 赤彩残存
31	人物 美豆良	AFJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良破片 赤彩残存
32	人物 美豆良	AFJ L	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良破片 赤彩残存
33	人物 美豆良	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	下げ美豆良か 赤彩残存
34	人物 耳飾り	AFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	女子の耳飾り 赤彩 35と対
35	人物 耳飾り	AFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	女子の耳飾り 34と対
36	人物 耳飾り	AFJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	女子の耳飾り
37	人物 髻	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻破片 炭化繊維混入
38	人物 髻	AFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻部分赤彩
39	人物 髻	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻 撥形 元結剃落 赤彩
40	人物 髻	AFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻部分撥形 粘土板成形
41	人物 髻	AEFJ	A	C	ハケメ	8	ナデ	島田髻破片 分銅形
42	人物 髻	AEFJ	B	E	ハケメ	5	ナデ	島田髻破片 分銅形
43	人物 髻	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻破片 分銅形 赤彩
44	人物 髻	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻破片 撥形 端面赤彩
45	人物 髻	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	島田髻破片 撥形
46	人物 腕	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	右手部分 指欠損 中実成形
47	人物 腕	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	左手部分 中実成形
48	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ハケメ	12 左腕部分か 中実成形 赤彩残存	
49	人物 腕	AFJ L	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	右手部分 赤彩残存 中実成形
50	人物 腕	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	左手部分 赤彩残存 中実成形
51	人物 腕	AEFJ	A	C	ナデ	ナデ	ナデ	右手破片 中実成形 高脚小僧混入
52	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	右手部分 手首赤彩 53と対
53	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	左手部分 手首赤彩 52と対
54	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	左腕部分 中実成形 赤彩残存
55	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ハケメ	12 左腕部分 中実成形	
56	人物 腕	AEFJ	B	E	ナデ	ナデ	ナデ	左腕部分 中実成形
57	人物 腕	AEFJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	腕部破片 中実成形
58	人物 腕	AFJ L	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	腕基部 中実成形
59	人物 腕	AEFJ	A	E	ナデ	ナデ	ナデ	腕基部 指頭圧痕 中実成形

番号	器種	胎土	焼成	色調	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考
60	人物	腕	A E F J	A	C	ナデ	腕基部 外面赤彩 中実成形
61	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	腕基部 外面に指紋あり
62	人物	腕	A E F J	A	C	ナデ	右手首か 赤彩
63	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	腕部破片 中実成形
64	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	腕部分 赤彩残存 中実成形
65	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	左手部分 中実成形
66	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	左手部分 指欠損 中実成形
67	人物	腕	A E F J	A	C	ナデ	腕部 中実成形
68	人物	腕	A E F J	A	C	ナデ	右手部分 中実成形
69	人物	腕	A E F J	B	E	ナデ	右手部分 赤彩残存 中実成形
70	人物	腕	A E F J	A	B	ナデ	右腕部分か 混入か
71	不明		A F J	A	E	ナデ	腕部の付根か
72	不明		A F J	A	C	指頸痕	腕部の付根か
73	不明		A F J	C	E	指頸痕	器種不明 粘土塊 ハケメ残存
74	不明		A E F J	B	E	ナデ	ナデ
75	人物	指	A F J	A	C	ナデ	拇指か 赤彩残存
76	人物	指	A F G J	B	E	ナデ	ナデ
77	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指粘土紐成形
78	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 赤彩
79	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 赤彩 粘土紐成形
80	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 粘土紐成形
81	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 粘土紐成形
82	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 内側割落痕 粘土紐成形
83	人物	指	A F J	A	C	ナデ	指 粘土紐成形
84	不明		A F J	B	E	ナデ	拇指あるいは髻の元結
85	不明		A F J L	B	D	ナデ	拇指か 赤彩
86	不明		A F J	A	C	ナデ	頸飾り 赤彩
87	不明		A F J	A	C	ナデ	頸飾りの勾玉 赤彩
88	不明		A F J	A	C	ナデ	板状破片 外面線刻あり 赤彩
89	人物	鏡	A E F J	B	E	ハケメ	9 女子のもつ鏡 鏡赤彩あり
90	人物	腰帯	A E F J	B	E	ハケメ	9 腰部分か 腰帯を表現 赤彩
91	人物	琴	A E F J	A	C	ナデ	ナデ
92	人物	琴	A E F J	B	E	ナデ	ナデ
93	不明		A E F J	A	D	縦ハケ	14 右傾斜ハケ
94	家		A E F J	A	C	粗いハケメ	9 ナデ
95	家	屋根	A E F J K	A	B	縦ハケ・ナデ	9 縦ハケ・ナデ
96	鈴		E F J K	A	B	ナデ	
97	鈴		E F J K	A	B	ナデ	粘土塊成形基部粘土紐貼付
98	鈴		E F J	A	B	ナデ	粘土塊成形基部粘土紐貼付
99	馬	尻尾	A F J K	A	C	ナデ	ナデ
100	不明		A E F J	B	E	ハケメ	5 ナデ
101	不明		A E F J	B	E	ナデ	ハケメ・ナデ
102	不明		A E F J	B	E	ナデ	右傾斜ハケ
103	不明		A E F J	A	E	ナデ	器種不明 外面赤彩 炭化繊維混入

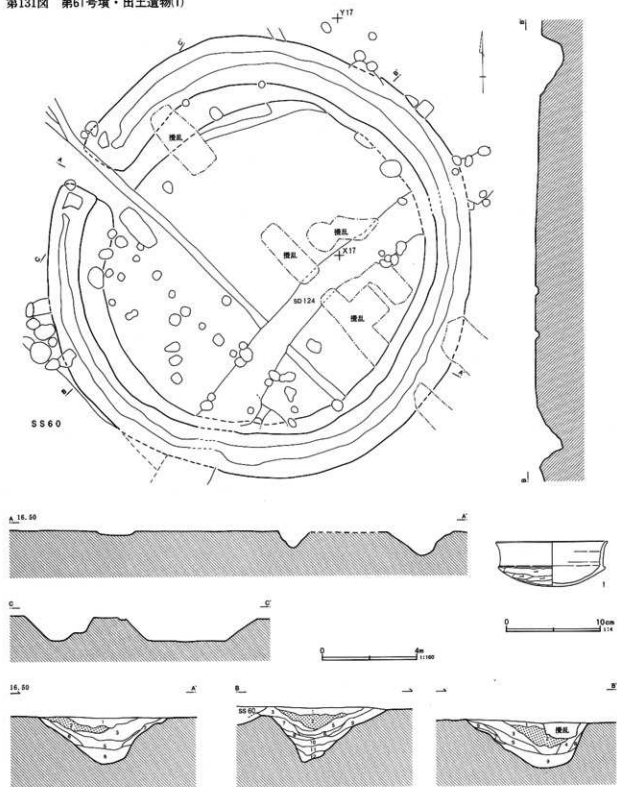
第61号墳 (第131~135図)

調査区中央、やや北寄りのW・X-15~17グリッドに位置している。南西側に第60号墳が近接し、周溝の一部に重複が認められた。土層断面の観察では第60号墳に後出して築造されたことが確認された。北西に向くブリッジをもった墳丘径15.3×15.0m、周溝径18.8×18.1mの円墳である。墳丘部は北東から南西に走行するSD124によって大きく壊されていた。

墳丘部の平面形態は形の整った円形である。周溝は

ほぼ一定の幅で巡り、周溝幅2.1~1.3m、深さ1.0~0.9mで、断面形はV字形に近い。周溝底面はやや凹凸がある。周溝の立ち上がりは、墳丘側は緩斜面を形成しているが、外側は急角度で立ち上がる。ブリッジは上幅1.4mで直線的にのび、主軸方向はN-109°-Wを示す。ブリッジの両輪にはステップ状の地山の掘り残し認められ、周溝掘削作業における足場や儀礼空間

第131図 第61号墳・出土遺物(I)



SS 61

- | | |
|--------|------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子微量含む。 |
| 2 黒褐色土 | ローム粒子、F A粒子少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。粘性あり。 |
| 4 褐色土 | ローム粒子微量含む。粘性あり。 |
| 5 褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 6 黄褐色土 | ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 7 褐色土 | ロームブロック多量含む。粘性あり。 |

- | | |
|---------|------------------------|
| 8 黄褐色土 | ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 9 黄褐色土 | ロームブロック、褐色粘土ブロック少量含む。 |
| 10 暗褐色土 | 暗褐色ブロック多量、ロームブロック微量含む。 |
| 11 暗褐色土 | 暗褐色ブロック多量含む。粘性あり。 |
| 12 黄褐色土 | ロームブロック少量含む。粘性あり。 |

0 2m 1:100

として機能していた可能性が考えられる。

周溝覆土は12層に細分される。下層にロームブロック・暗褐色ブロックを含む黄褐色土や暗褐色土が堆積していた。その上に填流流入土が薄く堆積し、上層の2層の中にFA粒子が少量含まれていた。

遺物は、ブリッジの右脇から土師器環と刀子、滑石製紡輪車がまとまって出土した。また北側の周溝部分を中心に埴輪が出土している。

土師器環は墳丘側の斜面部から口縁を上にした状態で出土した。刀子と紡輪車は、周溝底面から20cmほど浮いた状態で伴出している。

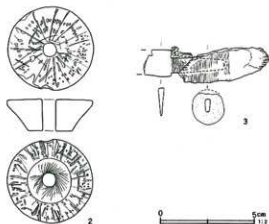
埴輪は周溝の北側を中心に出土し、全体に出土量は少ない。円筒埴輪は全体の形の分かるものはないが、2条凸帯以外に、3条凸帯のものも認められる。外面調整の差異によってA・B類に分けられる。

A類は外面調整に板ナデを施すもので、焼成や色調の違いにより赤褐色系のA1類と須恵質系のA2類に細分される。B類は縦ハケ調整のものである。8の朝顔形埴輪は、内外面調整や胎土・焼成・色調等の特徴は概ねA1類に共通する。へら記号は透孔の回りに円文を描いた特徴的なもので、対向する透孔にも描かれている。同様のへら記号は第60・63号墳からも少量出土している。

形象埴輪は女子人物埴輪の頭部のみが出土した。墳丘を削平するSD124の覆土中から出土したため、本墳に直接伴う確証に欠けるが、胎土・焼成・色調等の具合から本墳に伴う蓋然性が高い。耳孔の脇に剝落痕があり気になるが、頭頂部が平坦なことから鬘の剝落痕と解し、女子とした。

築造時期については、周溝覆土のFAの堆積状況や出土遺物などから第60号墳に後出する5世紀末から6世紀初頭の築造と推定される。

第132図 第61号墳出土遺物(2)

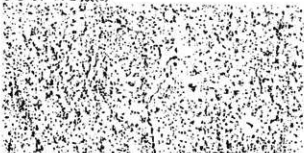


第133図 第61号墳埴輪ハケ拓影

SS 61 A 1類(4)



SS 61 A 2類(5)



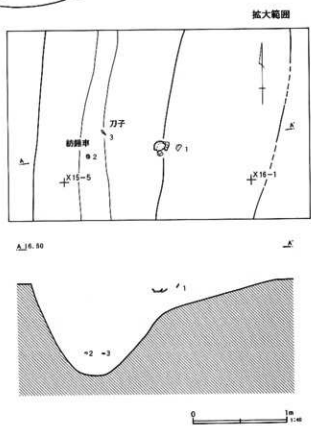
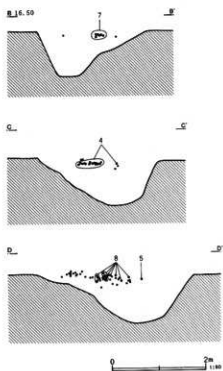
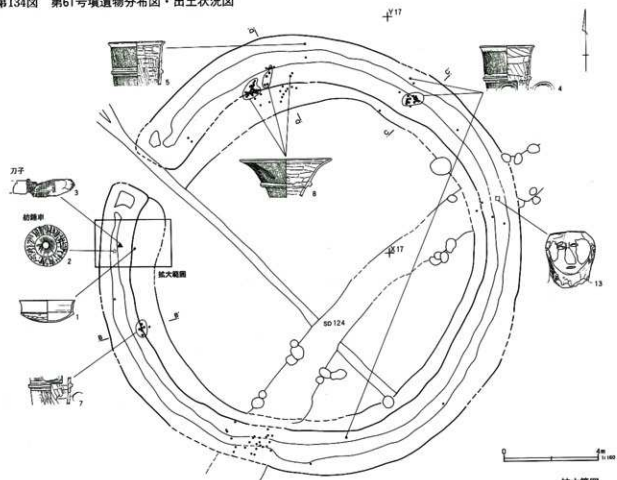
SS 61 B類(9)



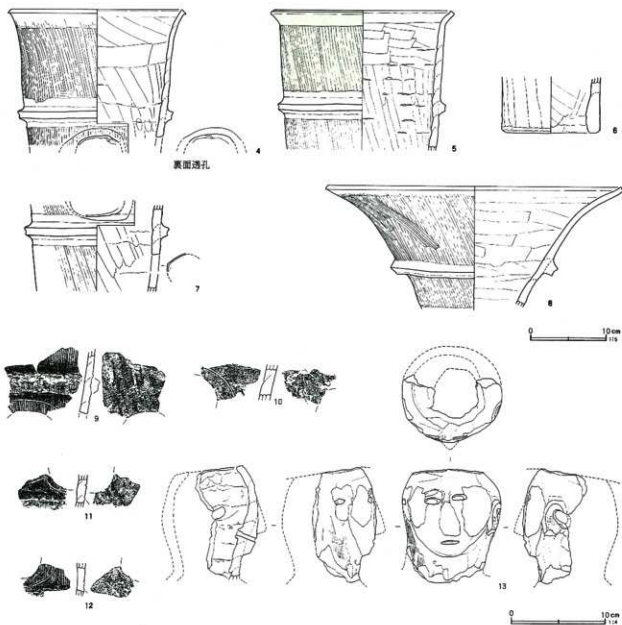
第61号墳出土遺物観察表 (第131・132図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.8	4.8		B E F J	A	橙褐色	90	口縁部外反
2	紡輪車	広径4.5×狭径2.3×孔径0.7×厚さ1.7cm、重量41.43g							滑石製 条線・点文を施文 内周 茎及び柄木卷糸痕あり
3	刀子	透刃長6.7、刀身幅1.4×厚さ0.25、茎長3.0cm、重量8.66g							

第134图 第61号墳遺物分布图·出土状况图



第135図 第61号墳出土土輪



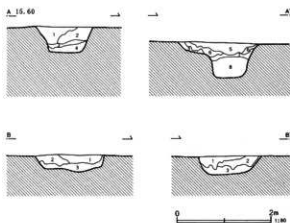
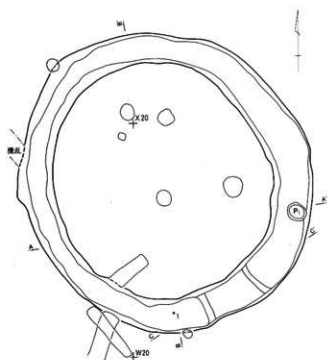
第61号墳出土土輪観察表 (第135図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
4	円筒	A1類	BFJ	A	A	55	板ナデ	ナデ		外面へラ記号
5	円筒	A2類	BFJL	A'	F	30	板ナデ	指ナデ	12	内面粘土継痕 須恵質 赤彩
6	円筒	A2類	BDFJ	A'	F	30	板ナデ	指ナデ		基部内面掌紋圧痕
7	円筒	A1類	BDFJ	A	A	30	板ナデ	ナデ		外面へラ記号 3条凸帯か
8	朝顔	A1類	AEFJL	A	A	70	板ナデ	ナデ		花状部破片
9	円筒	B類	BEFJ	A	C		縦ハケ	指ナデ		外面へラ記号
10	円筒	A2類	BFJL	A'	F		板ナデ	ナデ		外面へラ記号 須恵質
11	円筒	A1類	BDFJ	A	B		板ナデ	ナデ		外面へラ記号
12	円筒	B類	BFGJ	A	C		縦ハケ	ナデ	14	外面へラ記号
13	形象	人物	ABEFJ	A	C	50	ハケメ	ナデ		女子 鬘・鼻等剥落

第62号墳 (第136図)

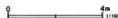
調査区北側の東寄り、W・X-19・20グリッドに位置している。第43号墳と第63・74号墳に挟まれ、周溝北東側は隣接する第74号墳の周溝を避けるように直

線的に変形する。墳丘径10.0×9.5m、周溝径12.8×12.5mの小規模な円墳で、南東を向くブリッジを有する。墳丘部にはSE122、SK951・954・982等の中・近世の遺構が多数重複していた。



SS62

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、ローム塊少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子少量、赤褐色ブロック多量含む。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒子、青灰色粘土少量含む。 |
| 8 青灰色土 | 混入物なし。粘性あり。 |



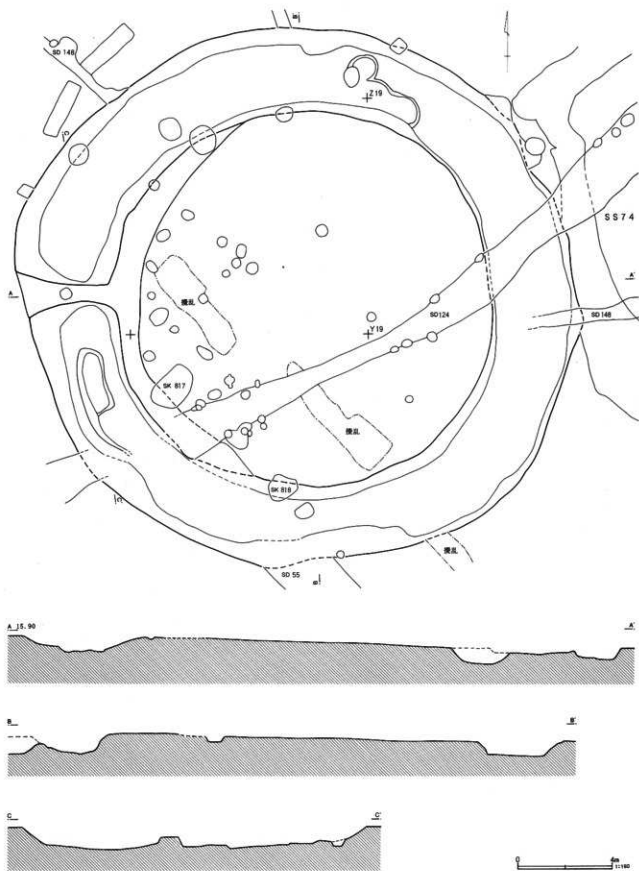
第62号墳出土遺物観察表 (第136図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.0)	(5.7)		A E F I J	B	淡褐色	30	内外面赤彩 片岩粒混入

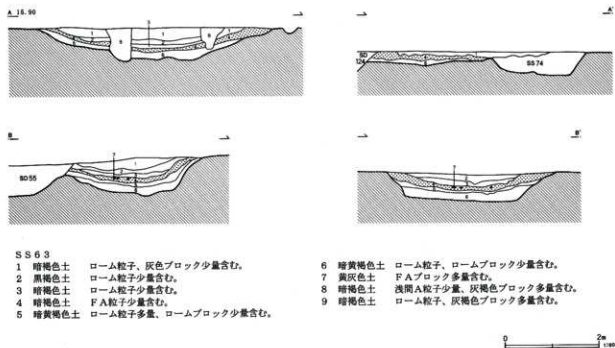
第62号墳出土土輪観察表 (第136図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
2	円筒	D E F J	B	D		右傾斜ハケ	10	横ハケ	9	SS43出土土輪に類似

第137图 第63号墳



第138図 第63号墳周溝土層断面図



墳丘部の平面形態は形の整った円形である。周溝はほぼ一定の幅で廻り、北東側やや直線的になる。周溝幅1.9~1.1m、深さ0.5~0.3mを測り、断面形は逆台形である。周溝底面は全体に平坦で、東側周溝部分に直径0.8m、深さ0.5mのピット1が確認された。ブリッジは、地山を幅広く掘り残したもので上幅2.0mを測り、主軸方向はN-147-Eを示す。

周溝覆土は8層に分けられる。覆土中にはFA粒子等の混入は確認されず、FA降下以後の築造の可能性が強い。なおピット1の覆土は粘性の強い青灰色土が堆積していた。

遺物は、周溝内から土師器杯や円筒埴輪の破片が少量出土しただけである。杯は内外面に赤彩を施し、底部外面にヘラケズリを施すものである。円筒埴輪は第43号墳の埴輪に類似した特徴を示しており、混入品と考えられる。埴輪の出土量は少なく、本来埴輪は樹立されていなかったものと推定される。

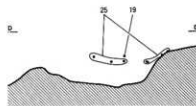
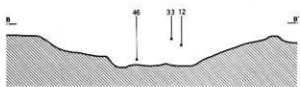
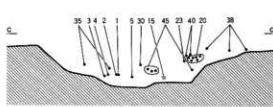
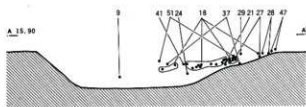
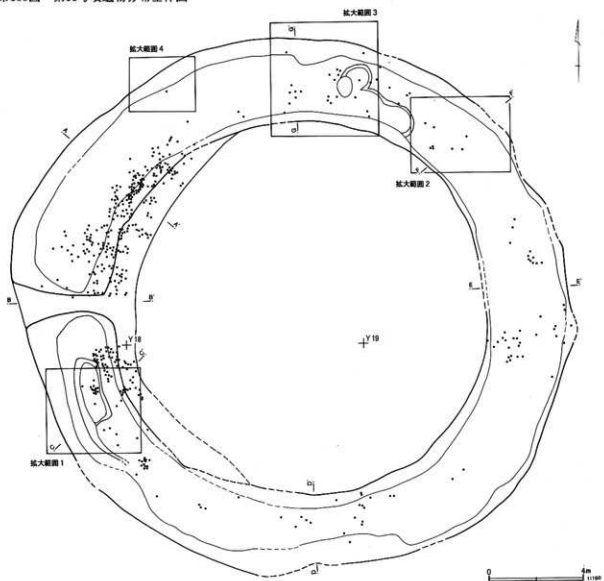
築造時期は、出土した土器の特徴や覆土中にFA等の火山灰の混入が確認できないことから、FA降下以後の6世紀前半の築造と思われる。

第63号墳 (第137~149図)

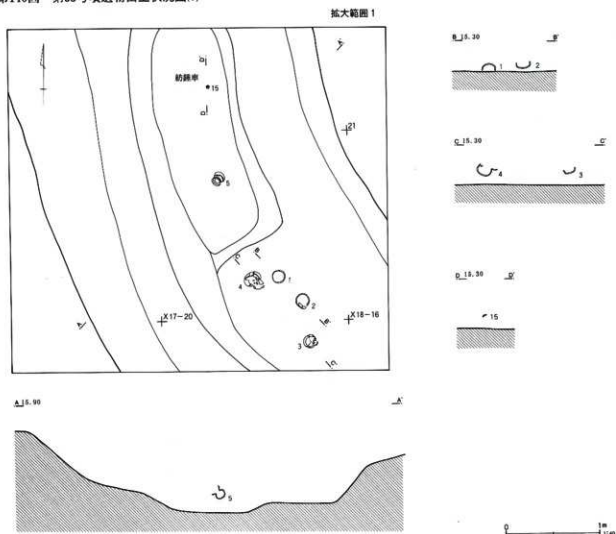
調査区の北側、X-Z-17-19グリッドを中心に位置している。周囲には北に第73号墳、東に第74号墳、南東に第62号墳、南西に第61号墳がそれぞれ隣接し、このうち第74号墳とは周溝の一部が重複していた。西に向くブリッジをもつ墳丘径16.3×15.8m、周溝径24.3×22.4mの大型の円墳である。墳丘規模は低位面に築造された古墳の中では南側に位置する第43号墳に次ぐ大きさである。墳丘部の中央を東西に走行するSD124によって削平されているほか、多数の井戸、土塀等の遺構が重複していた。

墳丘部の平面形態は形の整った円形で、周溝は全体に幅広く廻り、幅4.4~3.8mを測る。周溝の確認面からの深度は南側が最も深く0.8mを測り、東側は浅くなり深さ0.3mである。周溝底面は概ね平坦で、ブリッジ右脇に土塀状の浅い掘り込みが確認された。周溝の立ち上がりは全体に緩やかで、断面逆台形である。ブリッジは、他の古墳のような通路状のものとやや形状が異なり、周溝中央部に向かって緩やかなスロープを描く、馬の背状のものである。主軸方向はN-90°-W

第139图 第63号墳遺物分布全体図



第140図 第63号墳遺物出土状況図(1)



を示す。

周溝覆土は大きく7層に区分される。最下層にはローム粒子・ロームブロックを含む暗黄褐色土の5・6層が堆積していた。この層からは遺物がほとんど出土していないことから周溝掘削土の埋め戻しと考えられる。その直上を覆うようにFA粒子を混入した4層が堆積し、この層の中にFAブロックを多量に含む黄灰色土(7層)がまばらに含まれていた。

このように周溝底面付近にFAの混入土が堆積していることから、古墳の築造時期はFAの降下時期からあまり隔たらない時期であったと判断される。なお、東側に隣接する第74号墳との先後関係については、土層断面の観察では明確にすることができなかった。し

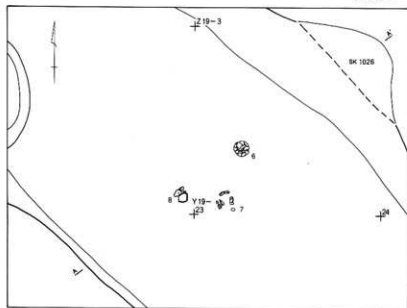
かし、第74号墳の内側周溝が本墳と近接した部分で急に幅を狭めていることからすれば、本墳が先行して築造されたものと想定される。

遺物は土師器環・直口壺・壺・甕、須恵器甕・甕、滑石製紡錘車、円筒埴輪等が出土した。

供献土器は周溝の4箇所から底面に置かれた状態で検出された(第143図)。

ブリッジ右脇には土師器環3、直口壺1、須恵器甕1、滑石製紡錘車1が底面に置かれた状態で出土し、同一時期の供献遺物のまとまりとして把握される(土器集中1)。第144図1~3の環と4の直口壺が一つのまとまりを示し、その北側に少し離れて5の甕と15の紡錘車が置かれていた。環は、いずれも体部の腰の張つ

拡大範囲2



A.15.99



た模倣坏で、1は伏せた状態で、2・3は口縁の上にして配置されていた。甕と紡錘車は土塊状の浅い掘り込みの内部から出土し、紡錘車は狭面を上に向け、南側に傾いた状態で出土した。甕は口縁部の一部を欠損するほかは完存していた。

また周溝の北東側からは土師器坏1、小型壺口縁部1、壺底部1が、周溝底面からまとまって出土した(土器集中2)。6の坏は赤彩された体部が半球形のもので、口縁を下にして伏せた状態で検出された。ほかに単独で周溝北側から土師器壺の胴部下半が、周溝北西側から土師器甕が横倒しの状態で出土した。9の甕は胴部のやや長胴化した器形のものである。

埴輪は周溝全体に広く分布していたが、特にブリッジの両脇に集中していた。埴輪の出土量は全体でコン

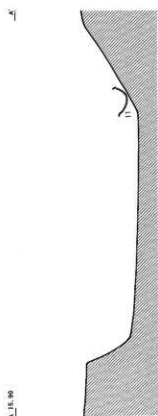
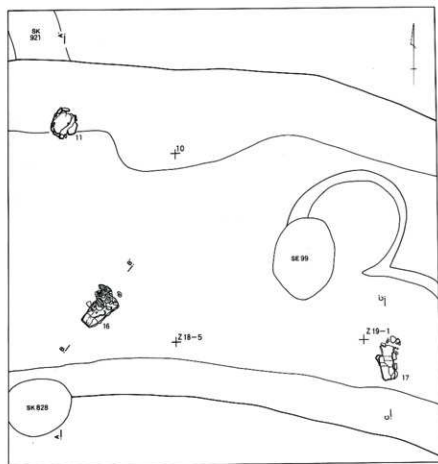
テナ3箱と少ない。円筒埴輪は2条凸帯3段構成のもので主体を占める。属性の違いからA～E類に分類される。さらにA類はA1～A3類に細分される。

A類は半円形透孔で、内面に鱗形の特徴的なヘラ記号をもつものを一括した。

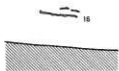
A1類は全体の器形の分かるものはないが最上段の幅が長い傾向を示す。色調は淡褐色を基調とし、透孔は半円形である。外面調整は縦ハケで、内面調整は最上段部分に右傾斜ハケを施す。A2類は硬質の焼き上がりで、橙褐色を基調とする。その他の特徴は概ねA1類に共通している。45の外面には縦条線のヘラ記号が一部残る。A3類は基本的な特徴はA1・2類に共通しているが、内面がナデ調整だけで仕上げられている。また31には凸帯下沈線が確認されている。

第142图 第63号墳遺物出土状況図(3)

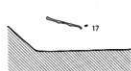
拡大範囲3



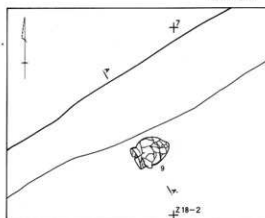
B 15.30



G 15.30



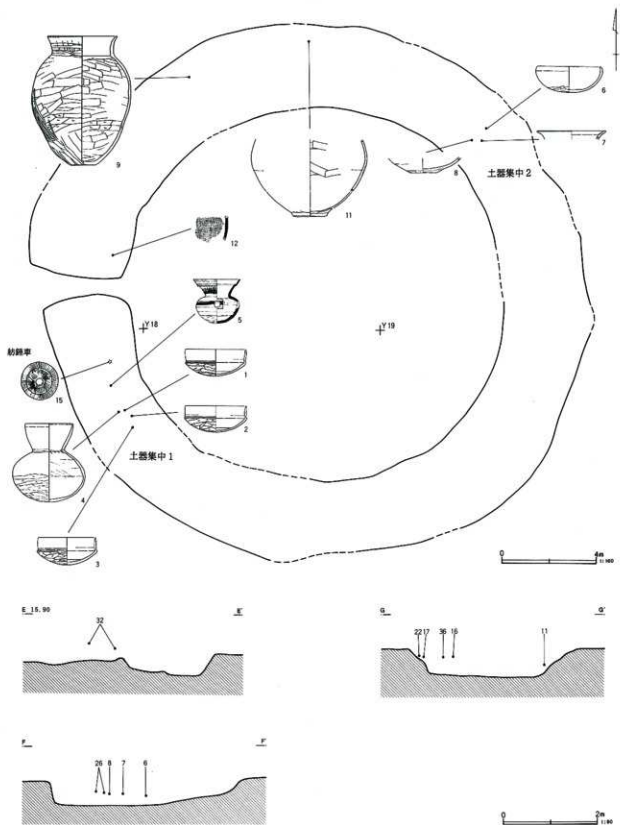
拡大範囲4



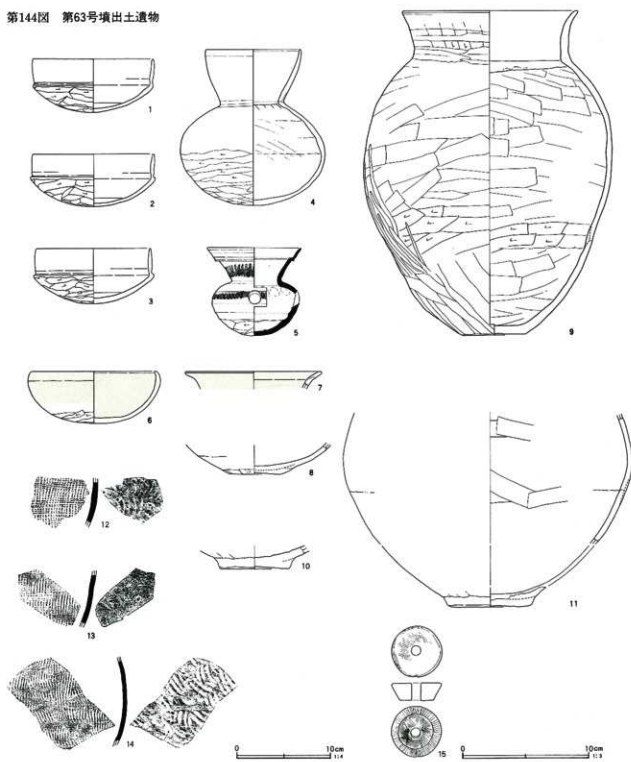
A 15.90



第143图 第63号墳遺物分布图



第144図 第63号墳出土遺物

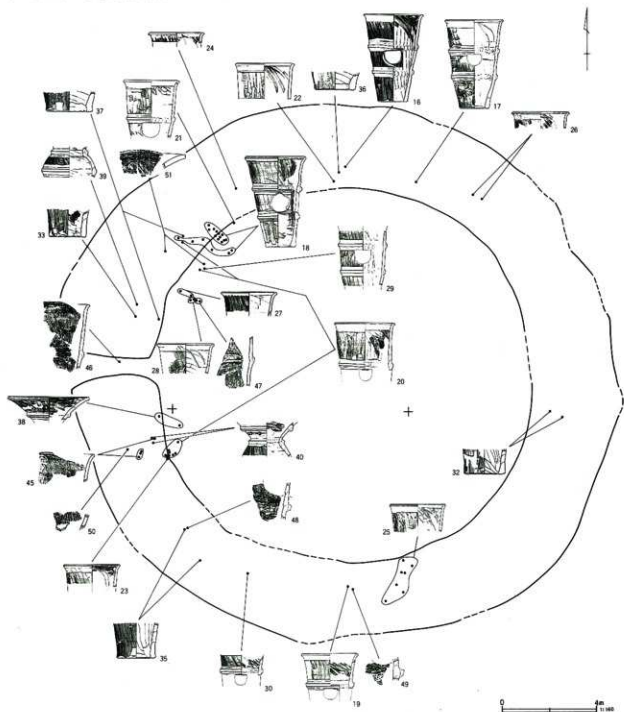


第63号墳出土遺物観察表 (第144図)

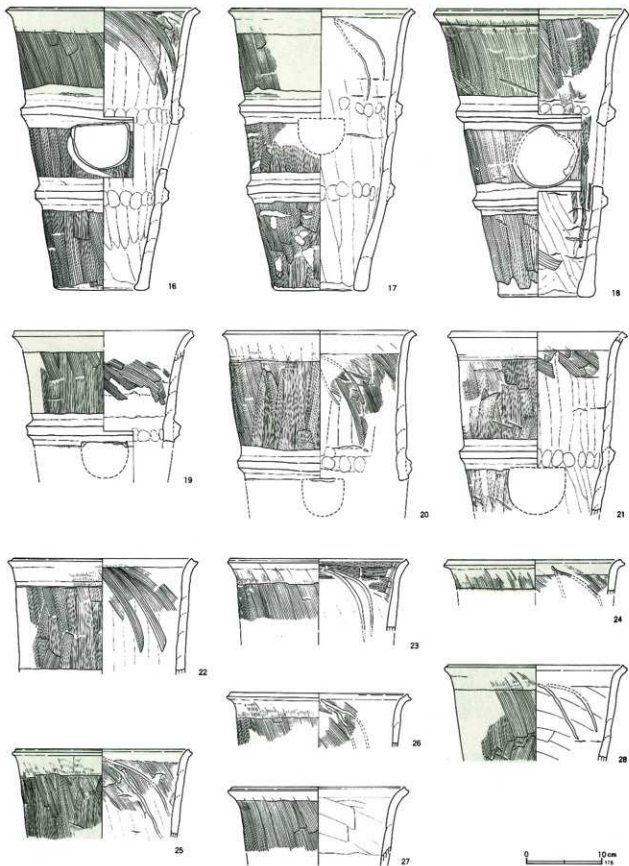
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.7	5.6		BDEF	A	赤褐色	100	口縁部やや内湾
2	坏	12.8	5.5		DEFJ	A	赤褐色	100	口縁部やや内湾
3	坏	12.2	5.8		BDEF	A	赤褐色	95	体部外面黒斑
4	直口壺	10.0	16.4		DEF	A	赤褐色	90	胴部下半ヘラケズリ
5	甌	10.1	9.4		ABGJ	A	暗灰色	95	内面降灰 口縁部一部欠損
6	坏	13.2	5.5		AEFIJ	C	淡褐色	80	内外面赤彩 体部外面黒斑 片岩粒混入

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
7	小型壺	14.6			DEFIJ	C	明褐色	60	内外面赤彩 器面風化	
8	壺			5.4	AFIJ	A	淡褐色	70	底部外面稜圧或あり	
9	甕	18.5	34.2	6.7	AEFIJ	A	淡褐色	80	胴部黒斑 長胴化	
10	壺			(7.5)	DEFIJ	B	淡褐色	45	内面凹凸顯著 混入か	
11	壺			9.0	AFIJ	B	淡褐色	30	内面剝離 炭化物混入	
12	甕				BGJ	B	暗灰色		外面擬格子印目後カキ目 内面ナゲ消し	
13	甕				BG	A	灰色		外面擬格子印目後カキ目 内面ナゲ消し	
14	甕				BGJ	A	灰色		外面平行印目後カキ目 内面ナゲ消し	
15	紡錘車	広径4.1×狭径2.8×孔径0.8×厚さ1.4cm、重量32.45g								滑石製 濃緑色 下面放射状細線

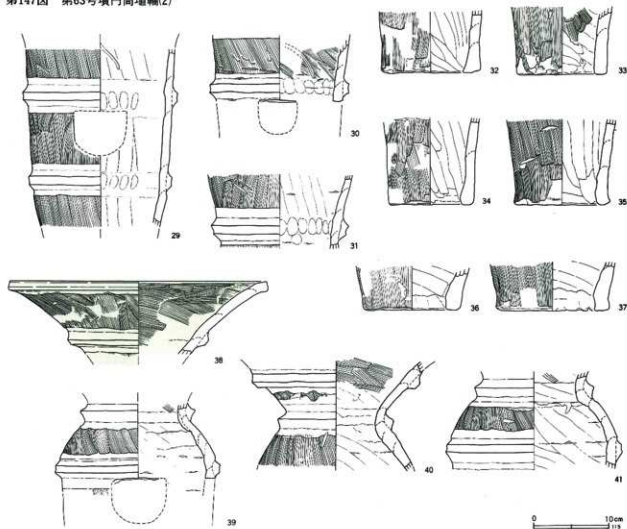
第145図 第63号墳埴輪分布図



第146図 第63号墳円筒埴輪(1)



第147図 第63号墳円筒埴輪(2)



第148図 第63号墳埴輪ハケ拓影

SS 63 A 1 類(20)



B類は半円形透孔で、色調は白っぽい橙褐色を基調とし、細かいハケメを用いる。A類と異なり、内面のヘラ記号は認められない。

C類は円形の透孔のもので、色調は橙褐色を基調とし、粗いハケメを用いるのが特徴である。

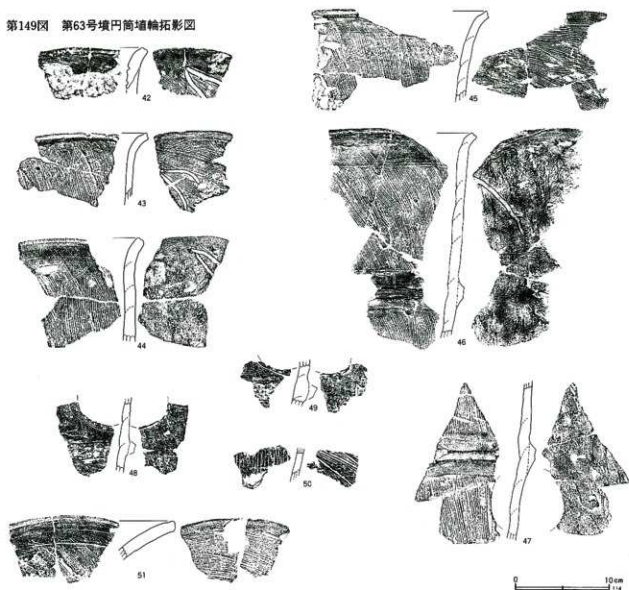
SS 63 A 2 類(38)



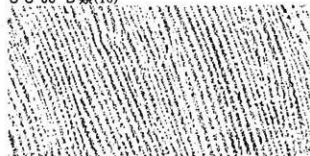
D類は第61号墳に特徴的な透孔の周りに円文のヘラ記号を有するもので、外面調整は板ナデである。2点だけしか出土していないことや、出土位置から第61号墳からの混入と考えてよいと思われる。

E類は前述の類型に該等しないものを一括した。

第149図 第63号墳円筒埴輪拓影図



S S 63 B類(16)



33は赤褐色の色調で細かいハケメを用いる。50は内面に斜条線のヘラ記号の一部が認められる。

朝顔形埴輪は全体の器形の分かるものはないが、半円形透孔を有し、概ねA類と同じである。38・39はA1類に、その他はA2類に共通した特徴を示す。

S S 63 C類(18)



築造時期は、周溝覆土中にFA混入土が堆積していたことからFAの降下以前に築造されたものであることが判明した。また出土した須恵器甕はTK23~47型式に比定されることから古墳群の形成開始時期に近い5世紀後葉から末葉に位置づけられる。

第63号墳出土土壌観察表(第146・147・149図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考	
16	円筒	B類	AFGJ	B	E	40	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	12	半円形透孔 赤彩
17	円筒	A3類	BEFJ	B	E	40	縦ハケ	12	指ナデ		内面ヘラ記号 底面木葉痕 赤彩
18	円筒	C類	BEFJ	B	C	70	縦ハケ	8	縦ハケ	8	基部R接合 底面溝圧痕 赤彩
19	円筒	B類	EFJ	C	E	30	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	11	半円形透孔 赤彩
20	円筒	A1類	AEFJ	B	E	50	縦ハケ	14	右傾斜ハケ	14	内面ヘラ記号 半円形透孔
21	円筒	A2類	EFJ	A	C	30	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	13	半円形透孔
22	円筒	A1類	AFJK	C	E	20	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	13	赤彩残存
23	円筒	A1類	AEFJ	B	E	40	縦ハケ	12	横ハケ	14	内面ヘラ記号 炭化繊維混入
24	円筒	A1類	AEEFGJ	B	E	90	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	13	内面ヘラ記号
25	円筒	A2類	EFJ	A	E	40	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	14	内面ヘラ記号 赤彩
26	円筒	A2類	BFJ	A	C	50	縦ハケ	12	右傾斜ハケ	15	内面ヘラ記号
27	円筒	A3類	EFJ	B	E	30	縦ハケ	12	ナデ		口唇部つまみ上げ
28	円筒	A3類	AEEFJ	B	E	40	右傾斜ハケ	12	ナデ		内面ヘラ記号 外面赤彩
29	円筒	A3類	AFJ	B	E	40	縦ハケ	14	指ナデ		内面ヘラ記号 赤彩残存
30	円筒	A1類	AFGJ	B	E	50	右傾斜ハケ	11	右傾斜ハケ	12	内面ヘラ記号 半円形透孔
31	円筒	A3類	ABFJ	B	E	30	縦ハケ	12	指ナデ		凸帯下沈線あり
32	円筒	A2類	ADFJ	C	E	40	縦ハケ	12	指ナデ		基部内外面ナデ 底面赤色粒付着
33	円筒	E類	AEEFJ	A	B	30	縦ハケ	15	右傾斜ハケ	14	基部R接合 基部内外面ナデ
34	円筒	A3類	AEEFJ	B	E	50	縦ハケ	12	指ナデ		基部R接合 底面平坦
35	円筒	A3類	AEEFJ	B	E	50	縦ハケ	12	指ナデ		底面窪圧痕・赤色粒子付着
36	円筒	A1類	AEEFJ	B	E	60	縦ハケ	12	ナデ		基部内面掌紋圧痕
37	円筒	A1類	BEFJ L	B	E	50	縦ハケ	11	ナデ		基部内面掌紋圧痕 底面葉状圧痕
38	朝顔	A2類	AFGJ	A	C	60	右傾斜ハケ	12	横ハケ	12	赤彩
39	朝顔	A2類	AEEFJ	B	E	40	右傾斜ハケ	12	指ナデ		炭化繊維混入 赤彩残存
40	朝顔	A1類	ABEJ	A	C	40	右傾斜ハケ	14	右傾斜ハケ	12	頸部破片
41	朝顔	A1類	AEEFJ	B	E	30	右傾斜ハケ	12	指ナデ		頸部凸帯赤彩残存
42	円筒	A2類	BEFJ	B	E		横ナデ		右傾斜ハケ	14	内面ヘラ記号 赤彩
43	円筒	A2類	AFJ	A	C		縦ハケ	12	右傾斜ハケ	12	内面ヘラ記号
44	円筒	A3類	AFJ	C	E		縦ハケ	13	ナデ		内面ヘラ記号 外面赤彩
45	円筒	A2類	AEF	B	E		縦ハケ	12	横ハケ	15	外面ヘラ記号 内外面赤彩
46	円筒	A3類	AEEFJ	B	E		右傾斜ハケ	12	指ナデ		内面ヘラ記号
47	円筒	A3類	EFJ	B	E		縦ハケ	14	指ナデ		外面赤彩
48	円筒	D類	BDFJ	A	B		板ナデ		ナデ		外面ヘラ記号 SS61埴輪と同一
49	円筒	D類	BDFJK	A	B		板ナデ		ナデ		外面ヘラ記号 SS61埴輪と同一
50	円筒	E類	EFGJ	B	E		縦ハケ	7	右傾斜ハケ	9	内面ヘラ記号 赤彩残存
51	朝顔	A1類	AEEFJ	B	E		右傾斜ハケ	12	横ハケ	12	花状部破片 器内厚い

第64号墳(第150図)

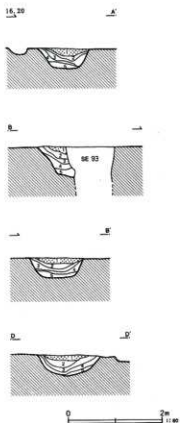
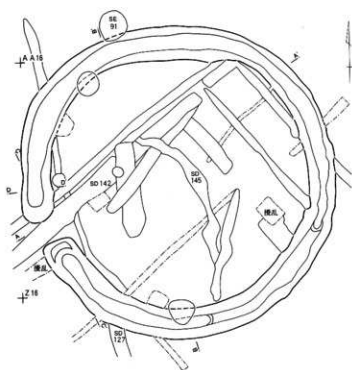
調査区中央、やや西寄りのY・Z・AA-16・17グリップに位置している。周囲には北に第69号墳、南に第61号墳がそれぞれ近接する。墳丘径11.0×10.6m、周溝径13.4mの中規模の円墳である。南西を向くブリッジは、SD142と重複し一部壊されていた。また墳丘部は井戸、溝、土壌等の後世の遺構が多数重複しており、内部主体等は検出できなかった。

墳丘部の平面形態は、周溝北側で直線的に変形しているほかは、比較的形の整った円形である。周溝はほぼ一定の幅で廻り、幅1.4-1.2m、深さ0.6-0.4mを測る。周溝底面は概ね平坦であるが、南東側の底面に

は段差が認められた。またブリッジ右脇にはステップ状の地山の掘り残り部分があり、周溝掘削時の作業上の足場や、儀礼空間としての機能が考えられる。周溝断面形は逆台形に近く、墳丘側の立ち上がりは緩やかで、外側は急角度に立ち上がる。

ブリッジはSD142によって一部壊されていたが、周溝外側に向かって直線的に開口し、主軸方向はN-113°-Wを示す。

覆土は大きく5層に区分される。最下層の5層はロームブロックを多量に含む暗黄褐色土である。この層の中には遺物がほとんど含まれていないことから、周溝掘削土の埋め戻しと考えられる。1-4層は墳丘



- SS64
- 1 黒褐色土 FA粒子、ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 4 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
 - 5 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量、暗褐色ブロック少量含む。

流入土に相当し、最上層の1層にのみFA粒子の混入が確認された。これにより築造後、一定期間をおいた段階にFAの降下があったと推定される。

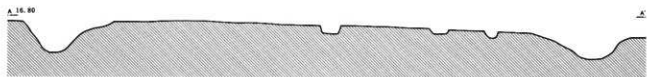
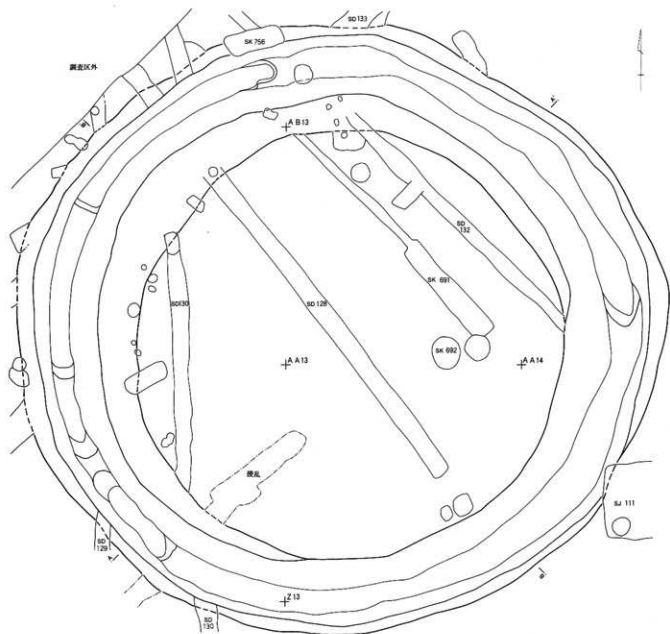
遺物はほとんどなく、覆土中から円筒埴輪の破片が少量出土したにすぎない。その出土量からみて当初から埴輪は樹立されていなかったものと考えられる。

築造時期については、時期を示すような遺物の出土がなく明確でないが、FA降下以前の築造であることが覆土の観察から判明した。

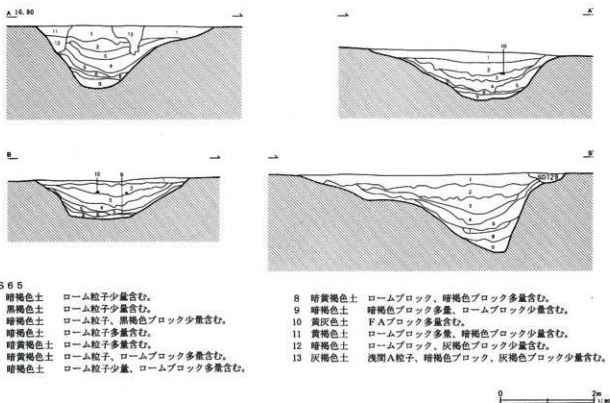
第65号墳 (第151～155区)

調査区北側、西寄りのZ・AA-12・13・14グリッドを中心に位置している。周囲には西に第66・67号墳が、北東に第68号墳がそれぞれ近接している。墳丘径20.1×19.5m、周溝径27.7×25.7mの大型の円墳で、ブリッジをもたない周溝の全周するタイプである。調査された古墳の中では、前方後円墳の第60号墳に次ぐ規模を誇り、円墳としては最大である。墳丘部はSD 128・130・132などの溝や土壌が多数重複し、大きく削

第151图 第65号墳



第152図 第65号墳周溝土層断面図



平されていた。

墳丘部の平面形態は、比較的整った円形である。周溝は上幅で4.4~2.9mと幅広いのに対して、底面の幅が狭く、掘り込みは1.6~0.8mと全体に深い。周溝の立ち上がりは墳丘側に緩斜面を形成し、緩やかに立ち上がっているが、墳丘外側は急角度に立ち上がる。周溝の断面形はV字形に近い部分がある。周溝底面には段差部分が数箇所に分けられていた。これは周溝掘削時の作業単位を示す可能性も考えられる。

周溝覆土は、概ね10層に細分される。基本的には下層にロームブロック・褐色ブロックを多量に含む暗褐色土・暗黄褐色土の7~9層が堆積し、この層からは遺物がほとんど出土しないことから周溝掘削土の埋め戻しと考えられる。この上層には墳丘流入土がレンズ状に薄く堆積し、2層と3層の間にFA純層の10層がまばらに堆積していた。これにより周溝がある程度埋没してからFAが降下したものと考えられる。

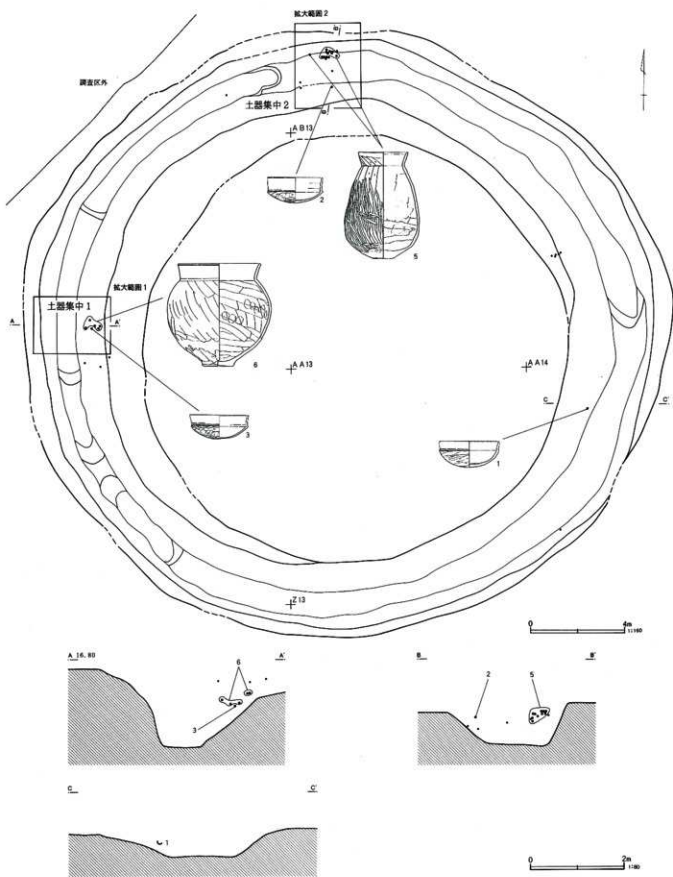
遺物は周溝の3箇所からまとまって出土した。周溝

西側から土師器環と広口甕（土器集中1）が、周溝北側から土師器環と甕（土器集中2）が、周溝東側から土師器環がそれぞれ検出された。

土器集中1は、周溝西側の墳丘寄りの斜面部から広口甕（第155図6）と環（3）が接した状態で検出された。広口甕は球形の胴部で、口唇部は面取りされ、胴部外面に黒斑が残る。環は口縁を下にして伏せた状態で出土した。口唇部を面取りした模倣坏で、口縁部はやや外反して立ち上がり、2よりもやや新しい様相を示している。

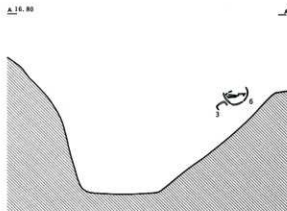
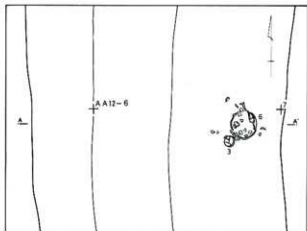
土器集中2は、周溝北側の周溝覆土中位から墳丘寄りに環（2）が、墳丘外側寄りから甕（5）が出土した。環は口縁を上にした状態で置かれ、ほぼ完成である。口唇部を丸くおさめ、口縁部の直立する模倣坏で3よりも古相を示しており、土器の供託に時期差が認められる。甕は胴部下半は完存していたが、胴部上半は破砕され、散在した状態で出土した。下膨れた長胴形の胴部が特徴的である。

第153图 第65号墳遺物分布図

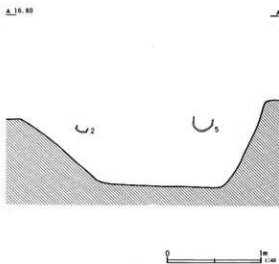
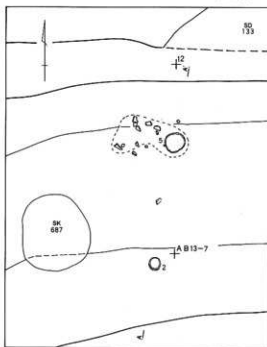


第154図 第65号墳遺物出土状況図

拡大範囲1



拡大範囲2



さらに周溝東側の墳丘寄り斜面部から単独で環(1)が出土した。口縁を上にした状態で置かれ、ほぼ完形である。半球形の体部に、短く外傾する口縁部に移行する。胎土中には白色針状物が含まれており、比企地域で製作されたものと推定される。

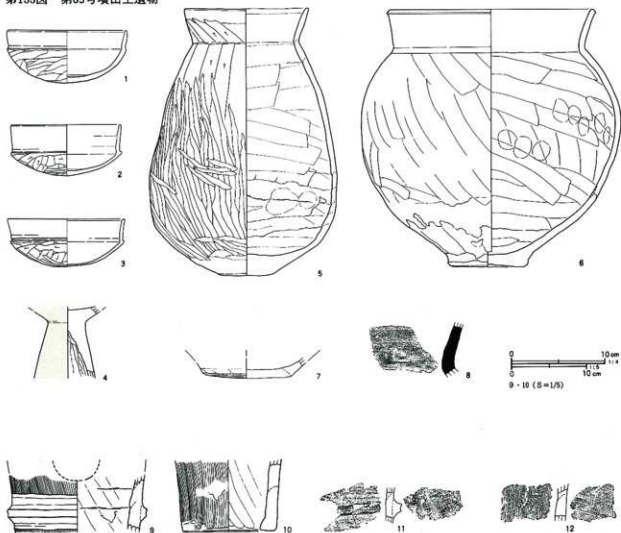
このほかに覆土中から土師器高坏破片(4)と壺底部(7)、須恵器甕口縁部(8)が出土している。甕は外面に波状文を施し、内面に降灰が認められる。

また周溝覆土中から埴輪片が少量出土した。いずれも小破片である。9・10は第58・60号墳出土埴輪に、

11は第61号墳出土埴輪の特徴に類似している。12は生足塚遺跡に特徴的な胎土・焼成・色調を示し、年代的にも後出するものであることから混入の可能性が強い。このように埴輪の出土量から推して、本来埴輪は樹立されていなかったものと判断され、他の大型の古墳が埴輪を樹立していることを勘案すれば、埴輪の樹立が規制された例として注目される。

築造時期については、周溝覆土中層にFAブロックが堆積していたことや、出土遺物の様相からFA降下以前の5世紀末から6世紀初頭の築造と推定される。

第155区 第65号墳出土遺物



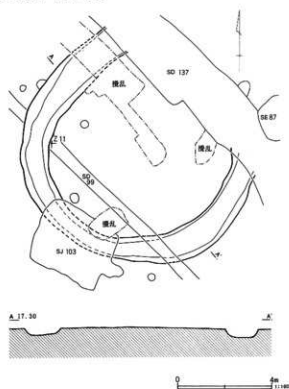
第65号墳出土遺物観察表 (第155区)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.6	5.6		CDEF	A	暗赤褐色	90	口唇部外面黒斑 白色針状物混入
2	環	11.6	5.4		BEFJ	A	橙褐色	90	口縁部外面黒斑
3	環	12.4	5.0		BEFJ	A	橙褐色	90	口唇部内傾
4	高環				AFJ	A	淡褐色	60	器面赤彩 AA-12G出土 混入か
5	甕	(12.9)	28.2	6.0	ADFIJ	B	淡褐色	60	胴部長頸化 外面ヘラミガキ
6	広口甕	21.5	27.1	8.5	AEFIJ	A	明褐色	80	胴部下半外面黒斑
7	壺			9.4	DEF	A	淡褐色	60	内面凹凸顯著 AB-13G出土 混入か
8	甕				BGJ	A	黒褐色		外面自然釉 内面降灰 AA-12G出土

第65号墳出土埴輪観察表 (第155区)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整 本/2cm	内面調整 本/2cm	備考
9	円筒	EFJ	B	D	60	縦ハケ	15	ナデ 炭化繊維混入
10	円筒	EFJ	B	D	40	縦ハケ	12	ナデ SS58・60出土埴輪に類似
11	円筒	BFJ	A	A		横ナデ	ナデ	SS61出土埴輪に類似
12	円筒	BEFJ	A	B		縦ハケ	20	右傾斜ハケ 20 生出土塚埴輪福年田期併行

第156図 第66号墳



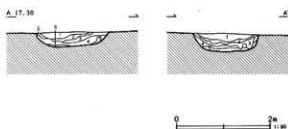
第66号墳 (第156図)

調査区北側、やや西寄りのY・Z-10・11グリッドに位置している。北西に第67号墳が、北東に第65号墳がそれぞれ隣接する。墳丘部北側はS D 137によって大きく削平され、ブリッジの有無は不明である。墳丘径7.9×7.7m、周溝径10.3×10.0mの小規模な円墳で、周溝の南西側にS J 103が重複する。

墳丘の平面形態は北東側の周溝が遺存していないため明確でないが、やや歪んだ円形である。北西側の周溝は近接する第67号墳の存在を意識したためやや直線的となる。周溝幅1.5~1.0m、深さ0.4~0.3mを測り、周溝底面は概ね平坦である。

周溝覆土は大きく5層に区分される。覆土中にはF A等の火山灰の混入はみられない。周溝の掘り込みが浅いため、覆土上層が削平されてしまった可能性もあるが、隣接する第67号墳との先後関係などを考慮するとF A降下後の築造と考えられる。

遺物は覆土中から土師器片が少量出土しただけであるため、築造時期については明確でない。



- SS 6 6
- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒子多量、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック、暗褐色ブロック少量含む。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック、暗褐色ブロック多量含む。 |
| 5 黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、暗褐色ブロック少量含む。 |

第67号墳 (第157図)

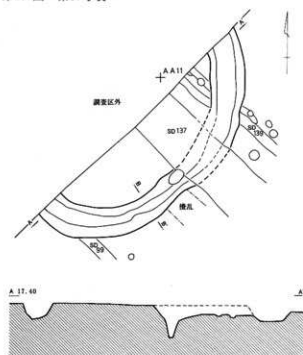
調査区の北側西寄り、Z-10・11、AA-11グリッドに位置し、西側が調査区域外にかかる。周囲には東に第65号墳、南東に第66号墳がそれぞれ隣接する。円墳であるとすれば、墳丘径8.6m、周溝径11.4m前後の大きさに復元される。墳丘部はS D 99・137・139によって一部削平されていた。

周溝は、調査部分ではほぼ一定の幅で巡り、北側で底面の幅をやや広げる。周溝幅1.5~1.1m、深さ0.7~0.4mで、底面に凹凸が認められた。周溝の断面形は逆台形に近く、立ち上がりは急傾斜で、掘り込みは全体に深くしっかりしている。

周溝覆土は6層に区分され、最上層の1層にF A粒子の混入が認められた。最下層の6層はロームブロックを多量に含み、周溝掘削土の埋め戻しであろう。

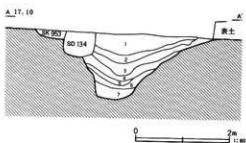
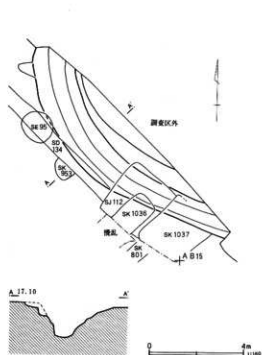
遺物は、周溝覆土中から埴輪片が少量出土しただけである。古墳に伴う遺物の検出はなかったが、周溝覆土にF Aの混入がみられることからF A降下以前の築造であることが判明した。

第157図 第67号墳



- SS 6 7
- | | |
|---------|-----------------------|
| 1 黒色土 | F A 粒子微量、ローム粒子少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量、黒色ブロック微量含む。 |
| 4 黄褐色土 | ロームブロック多量、褐色ブロック少量含む。 |
| 5 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、褐色ブロック少量含む。 |
| 6 褐色土 | ロームブロック多量含む。 |

第158図 第68号墳・出土遺物



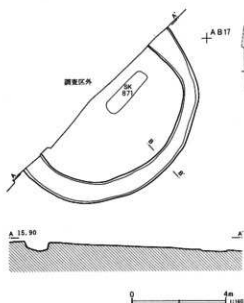
- SS 6 8
- | | |
|---------|----------------------|
| 1 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 4 暗黄褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 6 暗黄褐色土 | ローム粒子、ロームブロック少量含む。 |
| 7 暗黄褐色土 | ロームブロック多量含む。 |



第68号墳出土遺物観察表 (第158図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備	考
1	埴	(10.6)	(3.0)		BEJ	C	淡褐色	40	混入か	

第159図 第69号墳



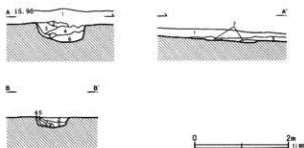
第68号墳 (第158図)

調査区の北側、やや西寄りのAB-14・15グリッドに位置している。大部分が調査区域外にかかるため周溝の一部を確認したにすぎない。検出した周溝部分をもとに墳丘規模を復元すれば、墳丘径約15m、周溝径約18mの中規模以上の円墳の可能性が強い。周囲には南西に第65号墳が、南東に第69号墳が隣接して構築されており、本来の墳丘規模を想定すると第69号墳との間隔はかなり狭くなるものと思われる。なお墳丘部分にはS J 112、SE 95、SK1036・1037、SD134等の遺構が重複していた。

周溝は上幅2.1m、深さ1.4mの掘り込みのしっかりしたもので、墳丘側は緩やかに弧を描きながら立ち上がり、断面形は箱葉研に近い形態である。周溝の底面は概ね平坦である。

周溝覆土は大きく7層に区分される。最下層にはロームブロックを多量に含む暗黄褐色土が堆積し、覆土中にはFA等の火山灰は確認されなかった。おそらくFA降下以後の築造と思われる。

遺物は直接古墳に伴うものではなく、混入品と考えられる古墳時代前期の埴形土器の口縁部片が出土したにすぎない。



SS 69

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 灰褐色土 | 浅間A粒子多量、焼土粒子少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 4 黒褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 5 黄褐色土 | ロームブロック少量含む。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 7 黄褐色土 | ローム粒子多量含む。 |

第69号墳 (第159図)

調査区の北側、やや西寄りのAA・AB-16グリッドに位置している。第64号墳の北側に近接し、北西側が調査区域外にのびるためブリッジの有無は不明である。墳丘径6.7m、周溝径8.6mほどの小規模な円墳と推定される。墳丘盛土は既に削平され、内部主体は確認できなかった。なお墳丘部分にはSK 871が重複していた。

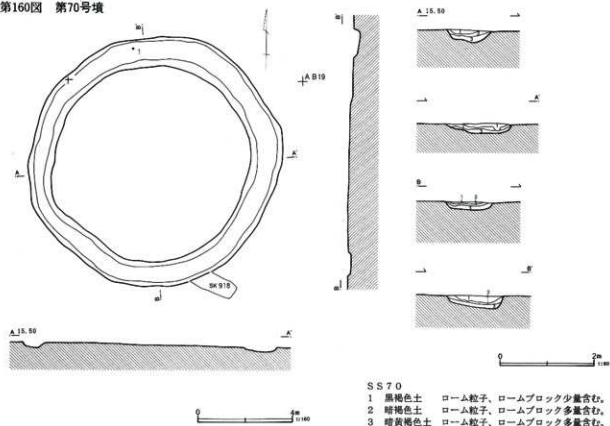
墳丘部の平面形態はやや歪んだ円形で、周溝は幅1.0~0.7m、深さ0.4~0.1mの掘り込みの浅いものである。周溝底面は概ね平坦で、断面形は立ち上がりの急な箱形に近い形態である。

周溝覆土は、浅間A軽石を含む耕作土の1層以下の6層に大きく区分される。ローム粒子を含む暗褐色土を主体とし、最下層にはロームブロックを含む黄褐色土が堆積していた。この層は周溝掘削土の埋め戻しと考えられる。

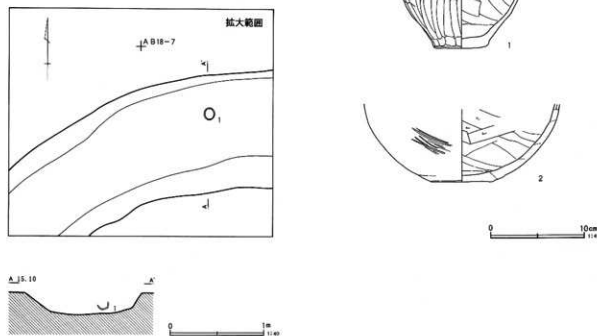
遺物はほとんど出土しなかった。

築造時期については出土遺物がなく明確でないが、周溝覆土にFAの混入がみられないことから、FA降下以後の築造と推定され、群内では後出するものと考えられる。

第160図 第70号墳



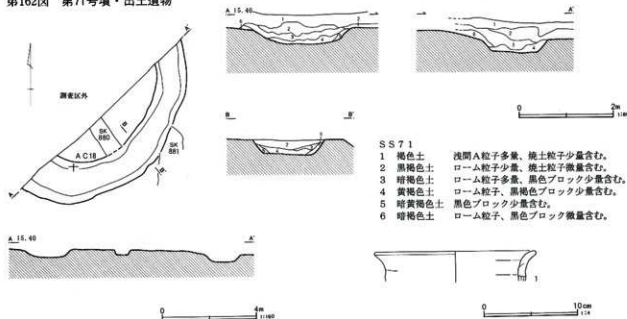
第161図 第70号墳遺物出土状況図・出土遺物



第70号墳出土遺物観察表 (第161図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	12.4	6.8	5.9	A F H I J	B	淡褐色	80	体部外面黒斑 片岩粒混入
2	壺			6.6	D E F J	A	暗赤褐色	40	胴部外面刀傷痕・黒斑あり

第162図 第71号墳・出土遺物



第71号墳出土遺物観察表 (第162図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備	考
1	甕	(17.2)			A F I J	B	淡褐色	10	口径不定	

第70号墳 (第160・161図)

調査区北側の低位面、AA・AB-17・18グリッドに位置している。周囲には北東に第72号墳が、南西に第73号墳が隣接する。墳丘径8.7×8.3m、周溝径11.0×10.5mの小規模な円墳で、周溝の全周するタイプである。

墳丘の平面形態はやや不整な円形で、周溝は西側で幅をやや狭め、幅1.4~0.9m、深さ0.25~0.15mを測る。断面形はU字形で、底面は概ね平坦である。

周溝覆土は3層に大きく区分される。最下層にはロームブロックを含む暗黄褐色土が堆積し、覆土中にはFA等の火山灰は確認されなかった。

出土遺物は、北側の周溝底面から土師器鉢が口縁を上に向けた状態で出土しているほか、覆土中から土師器壺の胴部下半の破片が出土した。壺の外表面には刃傷跡が認められた。

築造時期については、周溝の覆土中にFA粒子の混入がみられないことからFA降下以後の築造の可能性が高い。

第71号墳 (第162図)

調査区北側の低位面、AB・AC-17・18グリッドに位置し、第72号墳に近接している。墳丘北西側は調査区域外にかかるため、周溝の一部を検出しただけで、ブリッジの有無は明確でない。規模は墳丘径約5.7m、周溝径約9.2mの円墳と推定される。

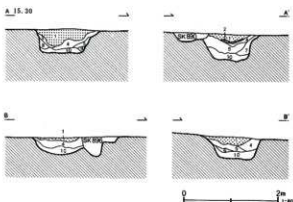
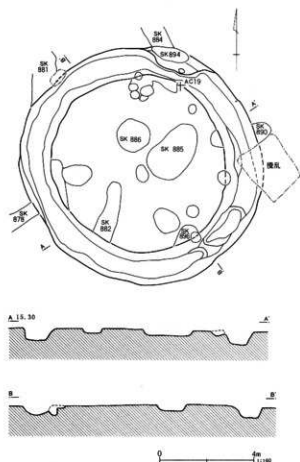
周溝は幅2.1~1.2mと他の同規模の古墳に比べ幅広くあるが、深さは0.4mと浅い。

周溝覆土は、浅間A軽石を含む耕作土の1層以下の5層に大きく区分される。ローム粒子を含む暗褐色土を主体とし、最下層にはローム粒子・黒褐色ブロックを含む黄褐色土が堆積していた。

遺物は土師器と円筒埴輪の破片が少量検出されただけで、実測図示できたのは土師器甕の口縁部破片のみである。器内の厚いつくりで、口縁部はコの字状の形態と推定され、古墳に伴うかは明らかでない。

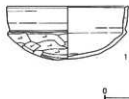
築造時期については、時期を示す良好な遺物がなく明確でないが、周溝覆土中にFAが含まれていないことからFA降下以後の築造と思われる。

第163図 第72号墳・出土遺物



SS72

- | | |
|---------|----------------------|
| 1 暗褐色土 | F A粒子多量、ローム粒子少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | F Aブロック多量含む。 |
| 3 黒褐色土 | ローム粒子微量含む、粘性あり。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子多量含む。 |
| 5 明褐色土 | ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。 |
| 6 暗黄褐色土 | 黒色ブロック少量含む、粘性あり。 |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック多量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子少量含む、粘性あり。 |
| 9 黒褐色土 | ロームブロック、黒褐色ブロック少量含む。 |
| 10 黄褐色土 | 黒色ブロック少量含む、粘性あり。 |



第72号墳出土遺物観察表 (第163図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.8	5.7		A E F G J	B	明褐色	90	器面風化 外面タール状附着物

第72号墳 (第163・164図)

調査区の北側、AB・AC-18・19グリッドに位置している。周囲には南に第70号墳、北西に第71号墳、北西に第75号墳が隣接する。ブリッジをもたない周溝の全周するタイプで、墳丘径7.7×7.4m、周溝径10.5×10.2mの小型の円墳である。墳丘部分には多数の土壌が重複し、大きく削平されていた。

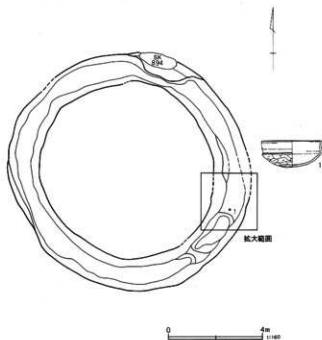
墳丘部は比較的形の整った円形で、周溝は一定の幅で巡り、周溝幅1.6~1.3m、深さ0.55~0.4mを測る。断面逆台形で、墳丘内側は緩やかに、墳丘外側はほぼ直に立ち上がる。周溝底面はやや凹凸があり、北側の底面にはテラス状の地山の掘り残り部分がある。また南側には土壌状の掘り込みが検出された。

周溝覆土は10層に区分される。最下層の10層は黒色ブロックを少量含んだ黄褐色土で、周溝掘削土と推定される。その上に墳丘流入土と考えられる1~9層が薄く堆積し、このうち最上層の1層にはF A粒子が多量に含まれていた。また北東側の土層断面の中層にレンズ状に薄く堆積したF Aの純層が確認された。

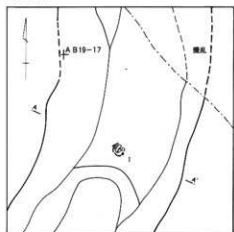
遺物の出土量は全体に少なく、周溝南東側からはほぼ完形の模倣坏が出土したただけである。坏は周溝の中央から口縁を上に向けた状態で出土し、周溝底面から約15cmほど浮いていた。

築造時期については周溝覆土上層にF Aブロックの堆積が確認されたことから、F A降下以前の築造であることが判明した。

第164図 第72号墳遺物出土状況図



拡大範囲



A 18.30



0 1m 1:40

第73号墳 (第165・166図)

調査区の北側、Z・AA-18・19・20グリッドに位置している。周囲には第63・70・74・77号墳が隣接し、単位群を形成している。南側で第74号墳の周溝と一部重複し、第63号墳とは僅か60cmの距離しか隔てていない。北西を向くブリッジをもつ小型の円墳で、墳丘径11.0×10.8m、周溝径14.4×14.2mである。墳丘部には多数の土壌が重複し、墳丘盛土は既に削平され内部主体等は確認できなかった。

墳丘部は比較的形の整った円形で、周溝はほぼ一定の幅で巡り、周溝幅1.8~1.6m、深さ0.7~0.6mを測る。断面逆台形で、墳丘内側は緩やかに、墳丘外側は急傾斜に立ち上がる。周溝底面の数箇所に段差がみられることから、築造時における掘削作業の単位を反映した可能性も考えられよう。

ブリッジの存在は確認面では分からなかったが、周溝部分を掘り下げたところ周溝の北西側で検出された。他の古墳にみられるような通路状のブリッジとは異なり、確認面よりも一段低くして周溝内に地山を掘

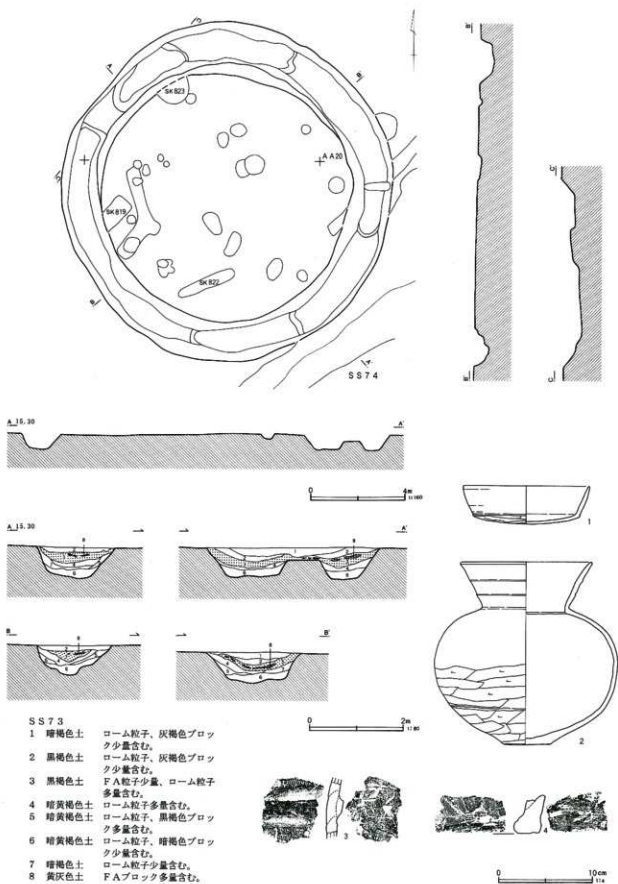
り残したもので、主軸方向はN-52°-Wを示す。

周溝覆土は8層に区分される。最下層の6層は暗褐色ブロックを少量含む暗黄褐色土で、周溝掘削土と推定される。その上に墳丘流入土と考えられる1~8層が薄く堆積し、このうち中層にあたる3層はFA粒子の混入土で、間層としてFAブロック(8層)がレンズ状に薄く堆積していた。第74号墳との切り合い関係については、残念ながら土層観察では明確にし得なかった。しかし、周溝の重複状況の検討からすれば本墳が先行して築造されていた蓋然性が強い。

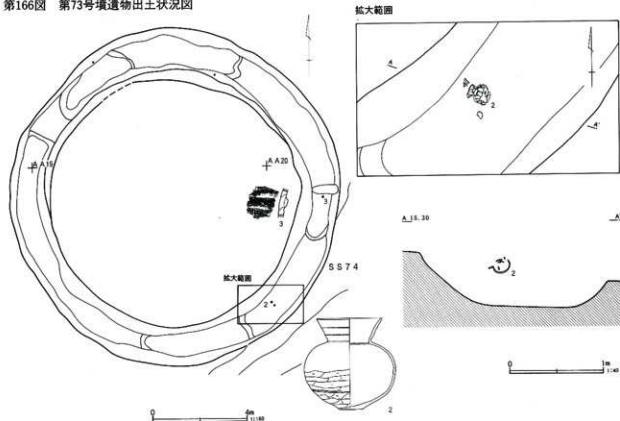
遺物の出土量は全体に少なく、周溝南東側からほぼ完形の土師器小型壺が出土した以外は、覆土中から土師器杯、円筒埴輪の破片が出土しただけである。小型壺は、墳丘寄りの位置から口縁を墳丘側に向けて横倒しの状態で出土し、周溝底面からやや浮いていた。杯は体部の扁平な模倣杯で類似に乏しい。

築造時期については、周溝の覆土中層にFAブロックの堆積が確認されたことから、FA降下以前の築造であることが判明した。

第165図 第73号墳・出土遺物



第166図 第73号墳遺物出土状況図



第73号墳出土遺物観察表 (第165図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.3)	(4.1)		DEFJ	B	赤褐色	20	口縁外面爪状突起 内面タール状付着物
2	小型壺	14.0	19.3	5.2	BDFJ	A	赤褐色	85	胴部下半ヘラケズリ

第73号墳出土土輪観察表 (第165図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
3	円筒	ADFJ	B	C		縦ハケ	11-12	ナデ		凸帯断面低台形
4	円筒	ADEFJ	B	D		縦ハケ	16-17	横ナデ		基部R接合

第74号墳 (第167~172図)

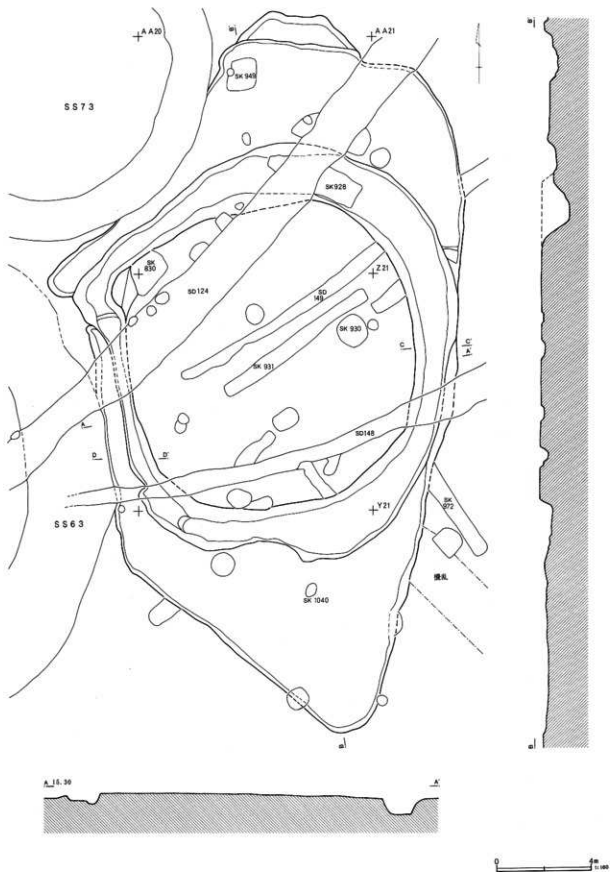
調査区北側、東寄りのX-Z-19~21グリッドに位置している。周囲には北に第77号墳、北西に第73号墳、西に第63号墳、南に第62号墳がそれぞれ近接する。このうち第63・73号墳とは周溝の一部が重複しているが、土層断面の観察では先後関係については明確にできなかった。しかし、周溝形態の検討や出土遺物の比較から両墳に後出して築造されたものと推定される。墳丘部はSD124・148をはじめとする多数の遺構によって削平され、内部主体等は確認できなかった。

本墳は墳丘部の平面形態は円形であるが、周溝の平

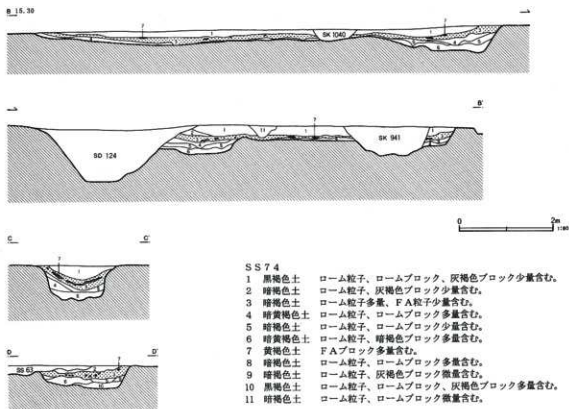
面形は一段深く掘り込んだ円形の周溝の外側に張り出し部が付属した変則的なものである。規模は、墳丘径12.7×12.4m、内側の周溝部分の径17.5×15.7mである。また張り出し部を含む南北方向の最大幅30.4m、東西方向の最大幅18.0mをそれぞれ測る。同様な周溝張り出し部を付設した古墳として、C区の調査で第40号墳が確認されている。また後述する第75号墳でも矩形の張り出し部が確認されている。

墳丘部の平面形態はやや歪んだ円形で、第63・73号墳に接する部分の墳裾は直線的に変形し、内側の周溝の幅も大きく狭めていることから、両墳に後続して営

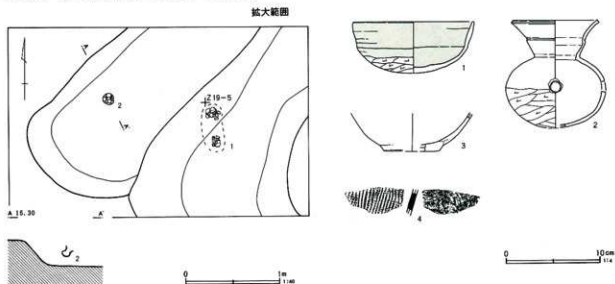
第167図 第74号墳



第168図 第74号墳周溝土層断面図



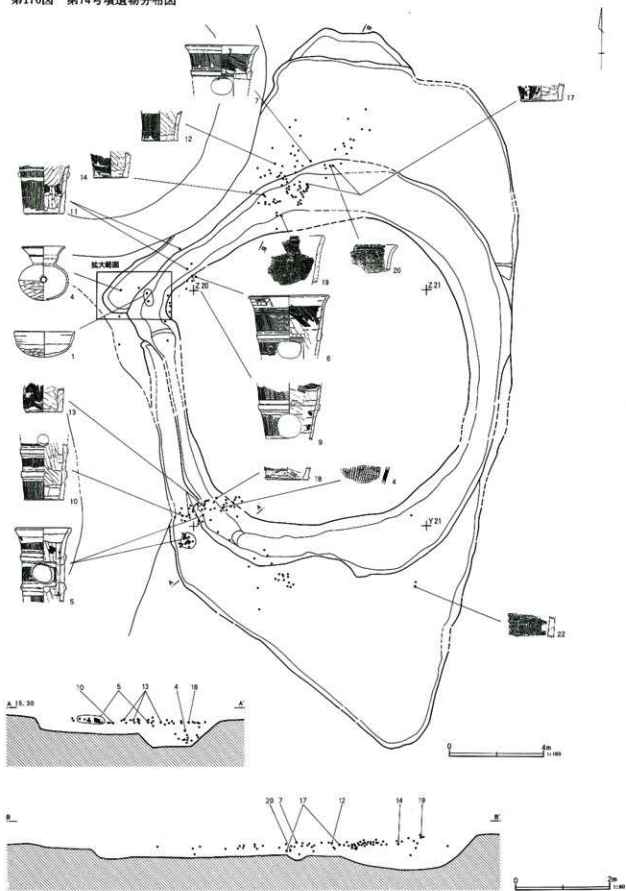
第169図 第74号墳遺物出土状況図・出土遺物



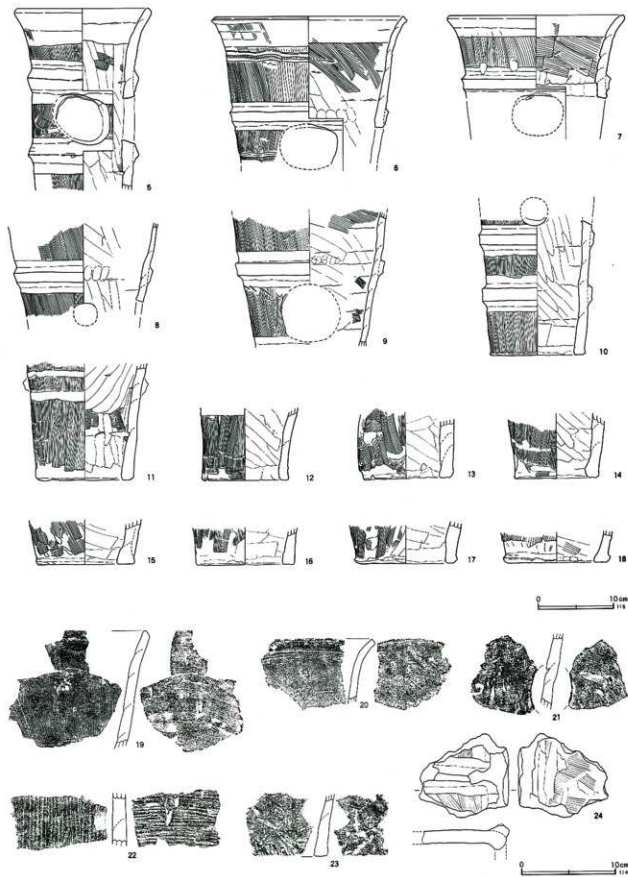
第74号墳出土遺物観察表 (第169図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	12.8	5.4		ADFIJ	B	淡褐色	70	内外面赤彩 片岩粒混入
2	甕	9.0	11.4	(6.0)	BEFJ	A	赤褐色	85	円孔焼成前穿孔 円孔周縁薄く剥離
3	甕				BEF	C	浅黄橙色	40	内面凹凸顯著
4	甕				BJ	A	黒褐色		外面擬格子印目 内面ナデ消し

第170图 第74号墳遺物分布図



第171图 第74号墳出土埴輪



まれたものと想定される。内側の周溝は、幅2.6~1.8m、深さ0.75~0.5mで、断面逆台形である。

周溝は、あらかじめ予定した墳丘盛土の掘削土量を確保するために、南北方向に舌状に大きく拡張し、明確な張り出し部を形成したものと考えられる。南側の周溝張り出し部は長さ7.3mで舌状に張り出し、底面は概ね平坦で掘り込みは全体に浅い。北側の周溝張り出し部は長さ5.5mで半円形に張り出し、底面に段差が造作され、掘り込みは全体に浅い。

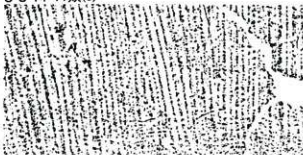
周溝覆土は、内側周溝部分の最下層にロームブロックを含む人為的な埋め戻しと考えられる4~6層が堆積し、その上をFAの純層(7層)を含むFA混入土の3層が直接覆っていた。同様に張り出し部底面の直上にも3層が薄く堆積していた。これにより古墳の築造後あまり経たないうちにFAが降下した可能性が考えられる。

遺物は、周溝覆土中から土師器杯、甕、須恵器甕、円筒埴輪、形象埴輪等が出土している。

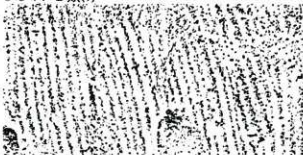
土師器の杯と甕は、第63号墳と第73号墳に挟まれた部分の周溝から伴出した。杯は破砕された状態で出土し、西側約1.1mの周溝底面直上から甕が口縁を上に向けて出土した。ほかに突出する底部の土師器甕と須

第172図 第74号墳埴輪ハケ拓影

SS 74 A類(6)



SS 74 B類(7)



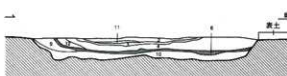
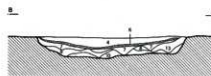
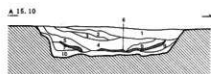
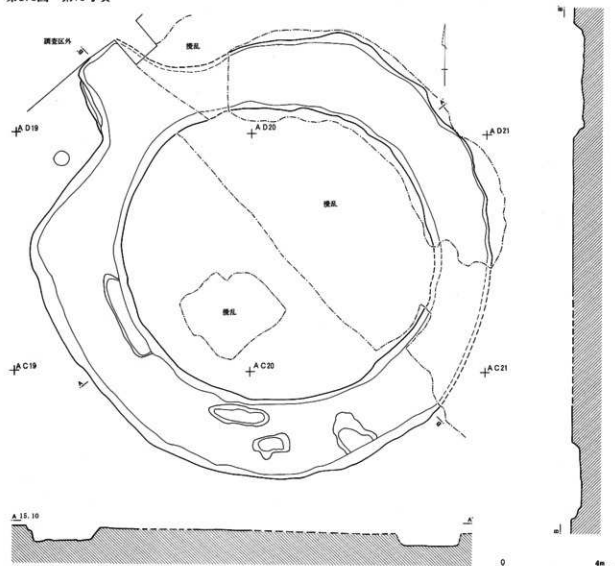
SS 74 C類(10)



第74号墳出土埴輪観察表 (第171図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
5	円筒	C類	BEFJ	A'	C	縦ハケ	18	横ハケ	16	凸帯断面三角形 須恵質
6	円筒	A類	AEFJ	A	C	縦ハケ	13	右傾斜ハケ	13	口縁部ヨコナゲ幅広
7	円筒	B類	AEFJ	A	C	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8	内面粘土紐痕明瞭
8	円筒	A類	AEFJ	A	C	縦ハケ	18	ナデ	18	小円形透孔 小礫多量混入
9	円筒	A類	AEFJ	A	C	縦ハケ	15	右傾斜ハケ	15	内面粘土紐痕明瞭
10	円筒	C類	BFJ	A'	E	縦ハケ	16	指ナデ	16	3条凸帯 小円形透孔 須恵質
11	円筒	A類	AFJ	A	B	縦ハケ	17	右傾斜ハケ	18	基部R接合・内面掌紋圧痕
12	円筒	A類	AFJL	A	B	縦ハケ	18	指ナデ	18	基部内面掌紋圧痕 底面木材圧痕
13	円筒	C類	DFJ	A'	F	縦ハケ	17	指ナデ	17	基部R接合・外面ナデ 須恵質
14	円筒	A類	AFJL	A	B	縦ハケ	18	指ナデ	18	基部R接合 底面葉状圧痕
15	円筒	A類	ADFFJ	A	D	縦ハケ	16	ナデ	16	基部内外面ナデ
16	円筒	A類	ABFJ	A	B	縦ハケ	14	ナデ	14	基部内外面ナデ
17	円筒	A類	AFJ	A	B	縦ハケ	14	ナデ	14	基部内外面ナデ
18	円筒	A類	ABFJ	A	B	縦ハケ	7	ナデ	7	基部内外面ナデ
19	円筒	A類	AEFJ	A	B	縦ハケ	15	横ハケ	15	朝顔形埴輪の可能性あり
20	円筒	A類	AEFJ	A	B	縦ハケ	18	ナデ	18	口縁部ヨコナゲ幅広
21	円筒		EFJ	B	D	板ナデ		ナデ		板ナデ調整
22	円筒		DEFJ	A	B	縦ハケ	6	横ハケ	7	大型円筒埴輪 混入か
23	円筒	A類	BEFJ	B	C	縦ハケ	14	ナデ	14	基部外面葉状圧痕
24	形象	家	BEFJ	A	A	ハケメ	10	ハケメ	10	壁体隅部破片混入か

第173図 第75号墳



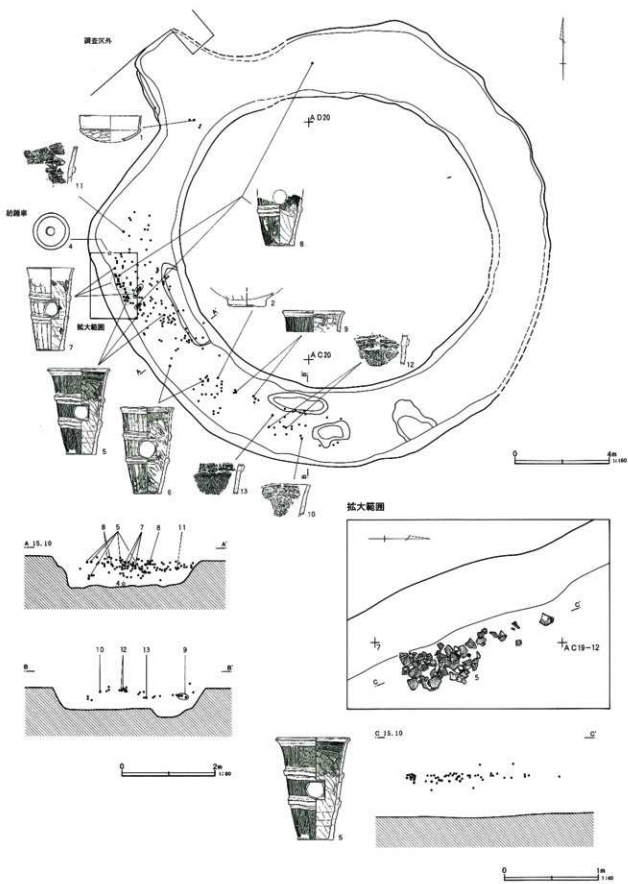
SS 75

- 1 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 黒褐色土 洗間B粒子、ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 6 黄褐色土 FAブロック少量含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロック微量含む。

- 8 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック微量含む。
- 10 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 11 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
- 12 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 13 暗褐色土 ロームブロック多量含む。



第174图 第75号墳遺物分布図



恵器残部片がある。

埴輪は、周溝の北側と南西側の2箇所に集中がみられた。円筒埴輪は、全体の形態が判明するものはないが、2条凸帯のA・B類と、3条凸帯で細身のC類に分けられる。

A類は橙褐色を基調とし、堅い焼き上がりのものである。外面調整は縦ハケで、内面調整は口縁部内面に右傾斜ハケ、下半部に指ナデを施す。ハケメは全体に細かい。透孔は円形で、凸帯は低台形である。

B類はA類に比べると最上段の幅が狭いのが特徴で、器肉が厚い。色調は橙褐色を基調とし、焼成は良好で堅く焼き上がる。外面調整縦ハケ、内面調整右傾斜ハケで、ハケメはやや粗い。透孔は円形で、凸帯は断面低台形である。

C類は段間幅の狭い、3条凸帯の細身のものである。色調は橙褐色を基調とし、焼成は良好で堅く焼き上がり、須恵質に近い。基底部の破片が多く、全体の器形に分かるものはないが、底部からあまり開かず立ち上がり、口縁部で緩やかに外反する。外面調整は縦ハケ、内面調整は指ナデを施す。透孔は円形で、凸帯は断面三角形ないし低台形である。

このほかに朝顔形埴輪の口縁部の可能性のある19や、外面調整に板ナデを施した21が出土している。また大型円筒埴輪の破片と考えられる22は混入品と考えられる。

形象埴輪は、混入と考えられる家形埴輪片があるだけで、確実に本墳に伴うものは認められなかった。

築造時期は、出土遺物や周溝張り出し部底面の直上にFAが堆積していたことから、FAの降下に近い時期の5世紀末から6世紀初頭と想定される。

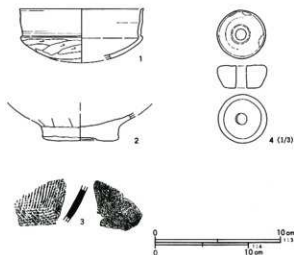
第75号墳 (第173~177図)

調査区北側のAB・AC・AD-19・20グリッドに位置し、南西側には第72号墳が近接する。周溝の北西側周縁が矩形に張り出した変則的な周溝形態の円墳で、墳丘径12.9×12.2m、周溝径20.9×19.5mを測る。墳丘の東半分は攪乱により大きく削平され、周溝底面の一部を遺存しているにすぎなかった。

墳丘の平面形態は比較的形の整った円形である。周溝は全体に幅広く、3.85~2.7m、深さ0.65~0.45mを測り、周溝断面形は逆台形である。周溝底面は概ね平坦であるが、土壌状の浅い掘り込みが数箇所に認められた。周溝張り出し部は、幅3.3m、長さ3.1mの矩形平面で、直線的に変形した北西側周溝の中央部に付設されていた。

周溝覆土は14層に細分される。最下層の10層はロームブロックを多量に含む黄褐色土で、この層からは遺物はほとんど出土していない。この層の直上にはFAブロックを少量混入する黄褐色土(6層)が薄く堆積していた。これによりFAの降下に近い時期に築造さ

第175図 第75号墳出土遺物



第75号墳出土遺物観察表 (第175図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(13.1)	(5.7)		DEFJK	B	橙褐色	30	口縁部直立
2	壺			8.1	DEFJ	B	明褐色	100	輪台状底部
3	甕				BGJ	A	灰色		外面平行印目 内面ナデ
4	紡輪車	広径3.9×狭径3.1×孔径0.9×厚さ1.8cm、重量46.64g							滑石製 暗褐色 円孔周囲同心円状に窪む

れたものと考えられる。

遺物は、周溝内から土師器環、壺、須恵器甕、滑石製紡錘車、円筒埴輪等が出土した。

環は周溝張り出し部付近から出土しているが、出土状況の詳細については不明である。紡錘車は周溝西側の溝底面直上から狭面を上に向けて出土した。

埴輪はすべて周溝に流れ込んだ状態で出土し、原位置を留めるものはなかった。分布状況は周溝の西側から南側にかけてまとまって出土した。

円筒埴輪は、全体の形の分かるものは2条凸帯3段構成が主体を占め、大きく4類に分類される。

A類は幅広い台形の凸帯が特徴で、口縁部は大きく外反する。透孔は円形に近いが、上辺が直線的に切られている。最上段外面には赤彩が施される。

B類はA類に比べ、口縁部の開きが小さく、凸帯は突出度の弱い低台形。透孔は大きな円孔である。

C類は外面調整に板ナデを施したものである。凸帯は断面低台形で、基部内面に掌紋圧痕を残す。最上段の外面に弧線状のへら記号がみられる。

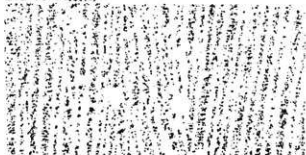
D類は須恵質のものを一括した。灰褐色を基調とし、堅緻な焼き上がりである。

なお、出土した埴輪の中には朝顔形埴輪や形象埴輪は含まれていなかった。

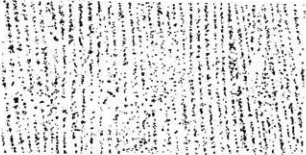
築造時期は、出土遺物の様相や周溝底面付近にFAブロックが堆積していたことから、FA降下以前の5世紀末から6世紀初頭の築造と推定される。

第176図 第75号埴輪ハケ拓影

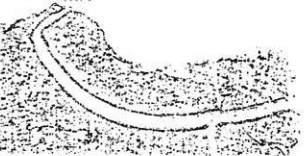
S S 75 A類(5)



S S 75 B類(6)



S S 75 C類(7)



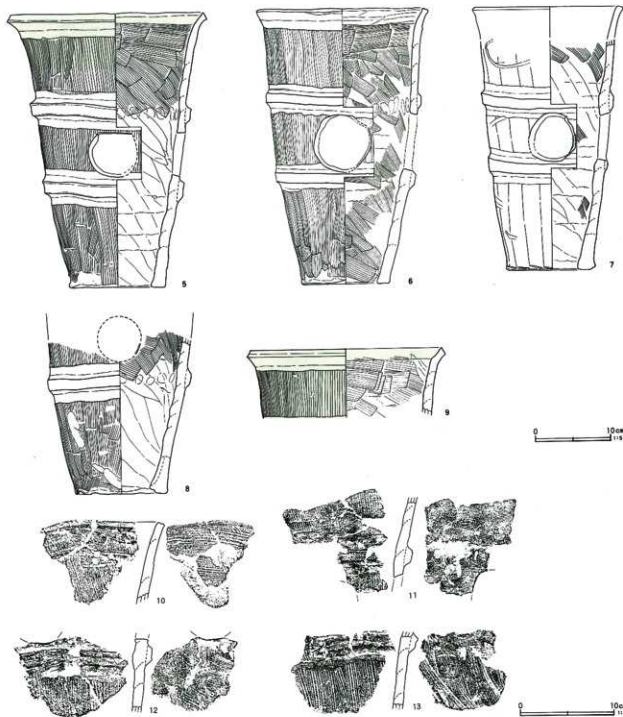
S S 75 D類(13)



第75号出土埴輪観察表 (第177図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
5	円筒	A類	E F J	A	C	75	縦ハケ	8	右傾斜ハケ	8 基部R接合・内面掌紋圧痕
6	円筒	B類	F G J L	B	E	70	縦ハケ	11	右傾斜ハケ	11 基部R接合 炭化繊維混入
7	円筒	C類	A F J L	A'	D	80	板ナデ		右傾斜ハケ	12 外面へら記号
8	円筒	A類	A B F J	B	E	80	縦ハケ	7	右傾斜ハケ	7 凸帯下沈線あり 炭化繊維混入
9	円筒	A類	B E F G J	A	E	20	縦ハケ	9	横ハケ	9 内面補修痕 半須恵質 赤彩
10	円筒	D類	D E F J	A	C		縦ハケ	12	横ハケ	10 赤彩残存
11	円筒	D類	A F J	A'	F		縦ハケ	9	右傾斜ハケ	10 凸帯断面台形 須恵質
12	円筒	D類	E F J K	A	C		縦ハケ	9	右傾斜ハケ	8 凸帯断面M字形
13	円筒	D類	A E F J L	A	C		縦ハケ	10	右傾斜ハケ	12 半須恵質 小礫多量混入

第177図 第75号墳円筒埴輪



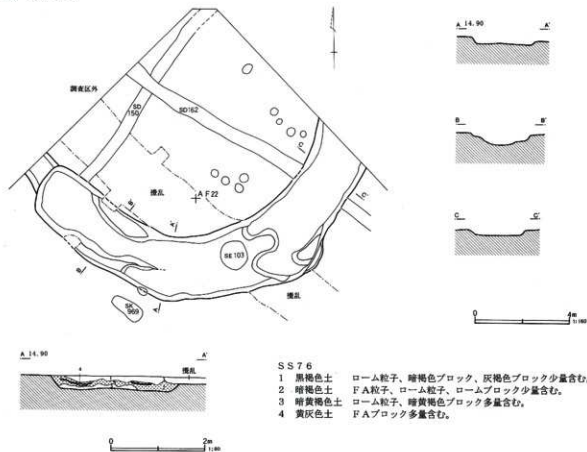
第76号墳 (第178図)

調査区の北端、AE・AF-21・22グリッドに位置する。第75号墳の東側に並んで構築され、墳丘の北半分が調査区域外にかかる。地形的には埋没谷の中に築造されていた。墳丘規模は、墳丘径約12m、周溝径約

17mの円墳と推定される。南西側に開口するブリッジをもち、主軸方向はN-133°-Wを示す。

確認部分における墳丘の平面形態は、ブリッジ側で直線的な部分がみられるほかは、比較的形の整った円形で、ブリッジ右側の周溝底面にはテラス状の地山の

第178図 第76号墳



掘り残し部分が認められた。周溝は幅3.2~2.7mと幅広く、深さは0.5~0.25mと浅い。底面は段差を設けながら東に向かって緩やかに傾斜していた。

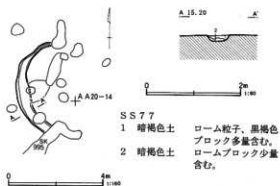
周溝覆土は大きく4層に区分される。FAブロックを間層に挟むFA粒子混入土(2層)が底面付近から検出されており、FA降下以前の築造であることが判明した。

遺物は、覆土中から平安時代の須恵器片が少量混入したが、古墳に直接伴うものは出土しなかった。

第77号墳 (第179図)

調査区の北側、AA-20グリッドに位置している。第73・74号墳の北側に近接し、大型墳に付属した占地状況を示す。周溝東側が削平され、周溝の約2分の1を検出したにすぎない。墳丘径約3.4m、周溝径約3.8mの小規模な円墳と推定され、今回の調査では最小規

第179図 第77号墳



模である。墳丘の平面形はやや歪んだ円形である。周溝は幅0.45m、深さ0.1mの断面U字形で、北側で幅を減じている。周溝覆土は2層に区分され、覆土中にF A等の火山灰の混入はみられなかった。

遺物がまったく出土しなかったため、築造時期は不明である。

3. グリッド

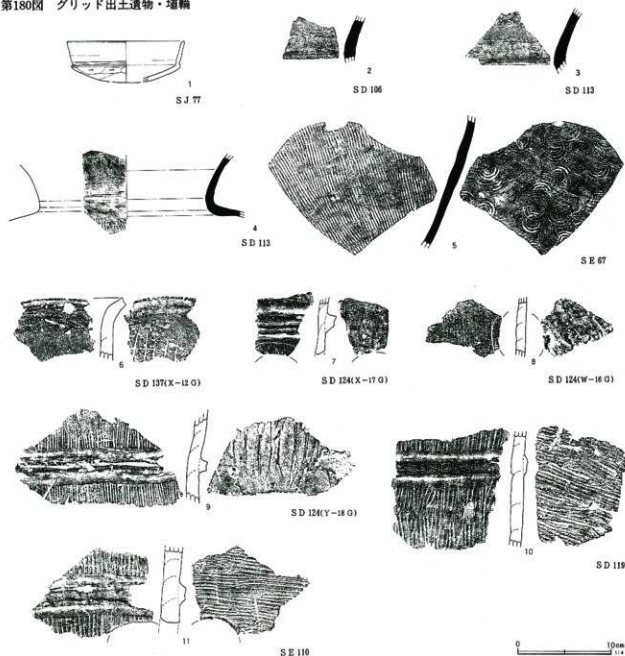
ここでは他の時代の遺構から出土し、帰属遺構の不明なものをグリッド出土遺物として説明する。

1は口縁部がやや外傾する土師器模倣坯である。古墳から出土する模倣坯に比べ、体部が浅く、腰の張りも弱くなり、新しい様相が窺われる。6世紀前半の所産であろう。2～5は須恵器壺の破片である。2～4は口縁部に柳播波状文を施文する。2・3は胎土に白

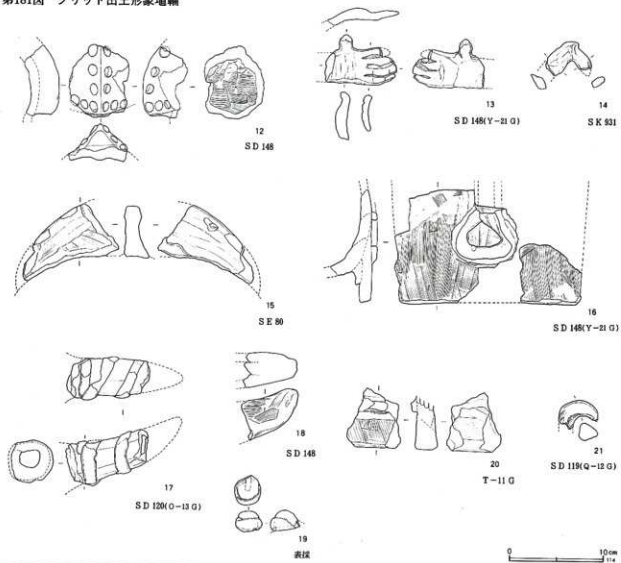
色針状物を含むことから南比企窯産の製品と考えられる。4は胴部外面に平行印目を残し、内面は同心円文当具痕をナデ消している。5は胴部下半の破片である。外面は擬格子印目、内面は同心円文当具痕をナデ消す。色調は青灰色で、断面セピア色である。

6は口縁部が短く外折する円筒埴輪である。内面に格子状のへら記号が認められる。暗赤褐色の色調や胎

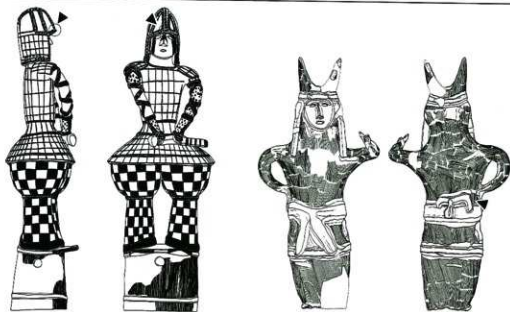
第180図 グリッド出土遺物・埴輪



第181図 グリッド出土形象埴輪



参考資料



(生田塚遺跡第1次調査出土)

(新屋敷遺跡C区出土)

土の特徴等から、生出塚窯埴輪編年Ⅲ期併行の6世紀後半に位置づけられる。格子状(田の字)のヘラ記号は生出塚遺跡D・E地点の埴輪捨て場までまとめて検出されているほか、埼玉二子山古墳、新屋敷17号墳等からも出土している。7・8は第61号墳出土の円筒埴輪に特徴的な透孔の周りに凹文を描いたヘラ記号をもつ破片である。外面調整は板ナデ調整を施す。2点とも第61号墳と重複するSD124から出土していることから第61号墳に帰属するものと思われる。

9~11は大型円筒埴輪の破片である。9は内面調整の指ナデが特徴的である。10は凸帯が低平なものでハケメは粗い。11は大型円筒埴輪の破片で、円形透孔が残る。透孔穿孔後、穿孔面に指ナデを施す。

12~21は形象埴輪の破片である。12は武人埴輪の着用した衝角付冑の破片である。粘土粒の貼付により鋸留を表現している。生出塚遺跡1次調査で出土した抜刀武人埴輪に表現が類似しており、胎土、焼成等の特徴から生出塚窯の製品と考えられる。13は人物埴輪の右手部分である。指はヘラ描きで表現される。14は参

考資料の新屋敷35号墳から出土した男子埴輪の腰につけられた両頭の鎌状のものに類似している。

15~19は馬形埴輪を一括した。15は鞍の前・後輪部分の破片である。器面には断面矩形の刺突痕がある。乾燥時の変形を防ぐために、刺した補助棒の痕跡であろうか。16は輪轂を表現した障泥の破片である。外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。また障泥と胴部の隙間には補充材として粘土塊が充填されている。17・18は尻尾の破片である。双方とも粘土紐を巻き上げて作った中空作りである。17は外側に帯を巻きつけた表現があり、第60号墳No99と接合した。18は円筒部分に粘土塊を挿入して尻尾の先端を彫作っている。19は胸繫や尻繫等につけられた鈴である。鈴口は刀子等の金属器を用いて切り込みを入れる。このうちSD148から出土した16・18は第74号墳との重複部分から出土しており、同墳に帰属する可能性がある。

20は家形埴輪の壁体部分の破片である。基部外面に凸帯を貼り付ける。21は鉤状の器種不明の破片である。断面三角形で、刺突痕は明確でない。

グリッド出土遺物観察表(第180図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.4)	(4.4)		BEFJ	A	橙褐色	20	口縁部外傾 器面風化
2	甕				BCJ	A	黒褐色		櫛溝波状文施文 南北比産
3	甕				BCJ	A	黒褐色		櫛溝波状文施文 南北比産
4	甕				ABJ	A	灰色	20	内外面障泥 外面平行印目 内面ナデ消し
5	甕				ABJ	A	青灰色		外面縦格子印目 内面ナデ消し

グリッド出土埴輪観察表(第180・181図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整	本/2cm	内面調整	本/2cm	備考
6	円筒	AEFJ	A	A		縦ハケ	14	右傾斜ハケ	15	内面ヘラ記号 生出塚編年Ⅲ期
7	円筒	BEFJ	A	B		板ナデ		ナデ		外面ヘラ記号 SS61埴輪に類似
8	円筒	ABFJ	A'	F		板ナデ		ナデ		外面ヘラ記号 SS61埴輪に類似
9	円筒	ABFJ	A	C		縦ハケ	9	指ナデ		大型円筒埴輪
10	円筒	AEFJ	A	C		縦ハケ	6	横ハケ	6	内面粗い横ハケ
11	円筒	AEFJ	A	C		縦ハケ	5	横ハケ	7	大型円筒埴輪
12	人物 衝角部	ABEFJ	A	A		ナデ		ハケメ	16	武人の鋸留衝角付冑の破片
13	人物 掌部	AEFJ	A	C		ナデ		ナデ		右手 ヘラ描きで指を表現する
14	不明	AFJ	A	C		ナデ		ナデ		人物埴輪の携帯する鎌
15	馬 鞍	ABEFJ	A	B		ハケメ	13	ナデ		鞍の前・後輪部分 刺突痕あり
16	馬 障泥	AEFJ	B	E		縦ハケ	16	ナデ		障泥破片 輪轂の表現
17	馬 尻尾	AFJK	A	C		ナデ		ナデ		中空成形 SS60No99と接合
18	馬 尻尾	AEFJL	B	D		ハケメ	14	ナデ		中空成形
19	鈴	AEFJ	A	C		ナデ		ナデ		小型の扁平な鈴
20	家 壁体	ABEFJ	A	B		ハケメ	12	横ハケ	10	壁体の基部 下端に凸帯を巡らす
21	不明	AEFJ	B	E		ナデ		ナデ		鉤状の破片 断面三角形

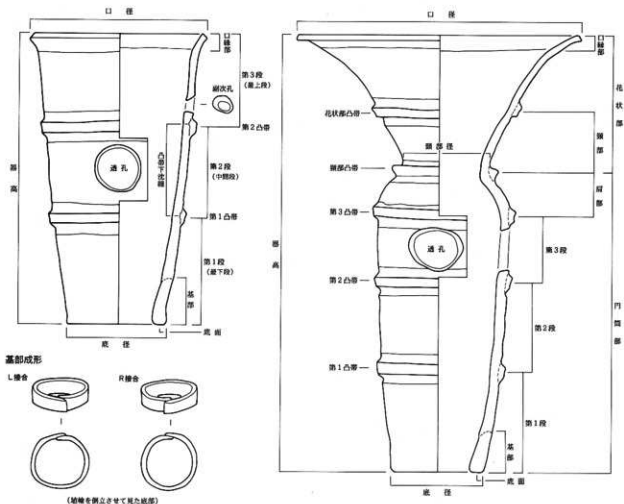
埴輪観察表凡例及び計測表

円筒埴輪

1. ここで扱う円筒埴輪とは普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の総称であり、形象埴輪とは図示方法及び観察表の記述方法が一部異なる。
2. 円筒埴輪の図示方法については原則として手描き実測に努め、残存率の低いものは拓影図とした。
3. 分類は事実記載部分で行った分類と対応する。
4. 胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。
A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…チャート、K…砂粒、L…小礫を基本とし、それ以外の特徴のあるものはその都度備考の欄に明記する。

5. 焼成はA良好、B普通、C不良の3ランクに大きく分け、須恵質（良好堅緻）をAとした。
6. 色調は全体の大部分を占めている色調を記し、A暗赤褐色・B赤褐色・C橙褐色・D淡褐色・E乳白色・F灰褐色・G黒褐色の大きく7段階に分ける。
7. 残存率は5パーセント毎に記載したが、大まかなもので厳密なものではない。
8. 外面調整及び内面調整は器表の主体的な調整法を記す。ハケメは、2cm当たりの本数で示し、若干の変位幅を含めている。また内面のハケメ調整のうち右傾斜ハケは向かって右下がりのハケメ、左傾斜ハケは同じく左下がりのハケメを指す。
9. 備考の欄には、成形、その他の製作技法の特記事

第182図 埴輪各部の名称及び計測位置



項を記した。副次孔、凸帯下沈線、赤彩等についても、この欄に記すこととした。

- へら記号のある場合は内外面の位置とその存在を記した。
- 出土位置は基本的に遺物分布図に記した。但し、周溝一括遺物はグリッド(G)を備考の欄に記した。
- 埴輪の年代的な位置づけについては、生田塚窯埴輪編年(山崎1994)を参考にした。

形象埴輪

- 形象埴輪の種類は、人物(男・女)、動物(馬)、器

財(壺)・家・その他(不明等)に区分され、掲載・記述の順序もこれに従っている。

- 胎土・色調・焼成・調整(ハケメ)については、円筒埴輪と同じ基準である。

埴輪計測表

- 埴輪各部の名称及び計測位置は第182図に示す通りである。
- 器径は、復元径の場合には()をつけた。また器高は残存高の場合に()をつけた。
- 朝顔形埴輪は頸部径についても記した。

第43号墳出土埴輪計測表(第51~53図)

番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	単位(cm)		単位(%)	
								1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径
7	円筒 A2	(23.6)	41.5	13.8	17.1	10.8	13.6	41.2	32.8	56.9	58.5
8	円筒 A2	(26.0)	41.0	13.8	14.8	12.0	14.2	36.1	34.6	63.4	53.1
9	円筒 A1	(25.9)	45.2	14.1	16.6	12.2	16.4	36.7	36.3	57.3	54.4
10	円筒 A2	26.1	40.7	15.2	15.0	12.0	13.7	36.9	33.7	64.1	58.2
11	円筒 A2	25.3	40.6	12.8	14.8	11.5	14.3	36.5	35.2	62.3	50.6
12	円筒 A1	24.6	44.7	13.7	16.8	12.3	15.6	37.6	34.9	55.0	55.7
13	円筒 A2	(24.1)					13.8				
14	円筒 A1	(26.6)					13.5				
15	円筒 B	(24.7)					12.4				
16	円筒 A3	26.5	39.6	12.8	14.4	11.4	13.8	36.4	34.8	66.9	48.3
17	円筒 A3	27.0	38.8	12.1	14.0	11.3	13.5	36.1	34.8	69.6	44.8
18	円筒 A2	25.1	41.3	12.5	13.7	10.9	16.7	33.2	40.4	60.8	49.8
19	円筒 A2	(23.1)	41.0	12.0	14.5	11.3	15.2	35.4	37.1	56.3	51.9
20	円筒 A2	25.5				11.4	12.4				
21	円筒 C	(22.2)									
22	円筒 A1		(20.5)	12.8	16.1						
23	円筒 A3		(24.3)	13.2	13.1						
24	円筒 A1		(28.6)	13.6	16.5						
25	円筒 D		(21.0)	14.0	13.9						
26	円筒 A2			12.4							
27	朝顔	(32.2)									
28	朝顔 A					9.0			頸部径(14.9)		

第58号墳出土埴輪計測表(第71~73図)

番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	単位(cm)		単位(%)	
								1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径
8	円筒 A3	(25.0)	37.3	14.1	13.4	11.5	12.4	35.9	33.2	67.0	56.4
9	円筒 A2	23.7	40.4	14.0	13.0	12.0	15.4	32.2	38.1	58.7	59.1
10	円筒 A1	23.8	40.5	14.2	13.0	12.5	15.0	32.1	37.0	58.8	59.7
11	円筒 A1	23.6	39.6	(11.8)	11.6	12.5	15.5	29.3	39.1	59.6	50.0
12	円筒 A1	24.6				11.8	15.5				
13	円筒 B	(22.0)	39.8	(13.4)	14.6	12.3	12.9	36.7	32.4	55.3	60.9
14	円筒 B	(22.4)				12.5	13.7				
15	円筒 A1	25.0					15.9				
16	円筒 A2	(25.8)									
17	円筒 C	(26.4)									
21	円筒 C			(10.6)	13.7						
23	円筒 D			(13.6)							
24	朝顔 B	39.5									
25	朝顔 B	(38.0)	(26.5)						頸部径12.3		
26	朝顔 C		(42.7)		12.0	11.0	10.1		頸部径12.9		

第60号填出土堆輪計測表 (第102~111・114~117回)

単位(cm)

単位(%)

番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径
1	円筒 A1	24.2	40.0	14.5	13.1	11.8	15.1	32.8	37.8	60.5	59.9
2	円筒 A1	(22.6)	38.9	14.1	14.4	11.9	12.6	37.0	32.4	58.1	62.4
3	円筒 A2	(24.0)	38.8	14.3	13.8	11.8	13.2	35.6	34.0	61.9	59.6
4	円筒 A2			13.4	15.6	12.0					
5	円筒 A2	26.0				11.9	13.5				
6	円筒 A2	24.5				11.7	10.9				
7	円筒 A1			(14.5)	14.0						
8	円筒 A1			12.7	13.9						
9	円筒 A1			13.6	14.1						
10	円筒 A2	22.5	37.1	11.7	14.0	11.8	11.3	37.7	30.5	60.6	52.0
11	円筒 B1	24.2	39.2	13.0	14.2	11.7	13.3	36.2	33.9	61.7	53.7
12	円筒 B1	(24.3)	38.5	13.1	14.3	12.2	12.0	37.1	31.2	63.1	53.9
13	円筒 B1	24.5	38.7	13.3	13.4	12.1	13.2	34.6	34.1	63.3	54.3
14	円筒 B2	(23.7)	38.8	13.2	14.1	12.2	12.5	36.3	32.2	61.1	55.7
15	円筒 B2	23.7	38.8	13.3	14.5	11.9	12.4	37.4	32.0	61.1	56.1
16	円筒 A2			14.6	16.9						
17	円筒 A2			14.1	17.5						
18	円筒 B1	25.0					13.5				
19	円筒 B2	23.9	39.5	14.1	14.0	12.2	13.3	35.4	33.7	60.5	59.0
20	円筒 B2	23.9	38.2	13.2	14.3	12.0	11.9	37.4	31.2	62.6	55.2
21	円筒 B2	22.5					11.9				
22	円筒 B3	22.5					13.4				
23	円筒 B3	24.8	37.3	(12.8)	12.6	11.9	12.8	33.8	34.3	66.5	51.6
24	円筒 B3	(23.4)	39.2	14.3	13.2	12.2	13.8	33.7	35.2	59.7	61.1
25	円筒 B3			(13.9)	13.4						
26	円筒 A2			14.5	14.9						
27	円筒 A2			12.5	14.0						
28	円筒 C1	(26.4)	44.5	16.0	14.1	11.8	18.6	31.7	41.8	59.3	60.6
29	円筒 C1	26.3	43.6	14.0	15.6	11.9	16.1	35.8	36.9	60.3	53.2
30	円筒 C2			(13.4)	15.6	12.7					
31	円筒 C2			14.6	15.4	12.1					
32	円筒 C1			(14.5)	15.4	12.0					
33	円筒 C1			16.4	15.8						
34	円筒 B3			14.4	13.4						
35	円筒 C1			14.5	15.8						
36	円筒 D1			15.0	14.9						
37	円筒 D1	(26.2)	43.5	15.7	14.4	11.8	17.3	33.1	39.8	60.2	59.9
38	円筒 D1	24.8	43.5	(13.9)	14.9	12.4	16.2	34.3	37.2	57.0	56.0
39	円筒 D1	(25.0)				11.7	16.5				
40	円筒 D2	(24.3)	42.8	14.5	14.2	12.1	16.5	33.2	38.6	56.8	59.7
41	円筒 D2			(13.8)	14.8	12.0					
42	円筒 D2	(27.7)	45.8	16.3	14.8	11.8	19.2	32.3	41.9	60.5	58.8
43	円筒 D2			14.6							
44	円筒 D2			14.7	14.2						
45	円筒 D2			(13.2)	14.6						
46	円筒 E1	(25.1)	43.5	12.8	15.1	12.3	16.1	34.7	37.0	57.7	51.0
47	円筒 E1	22.9					16.4				
48	円筒 E1	24.4					14.7				
49	円筒 E2	22.0	43.3	14.0	15.6	12.3	15.4	36.0	35.6	50.8	63.6
50	円筒 E2	(24.9)	42.5	14.0	14.2	11.9	16.4	33.4	38.6	58.6	56.2
51	円筒 E2	(23.9)				11.2	14.6				
52	円筒 E2	24.2	43.3	14.5	14.5	12.6	16.2	33.5	37.4	55.9	59.9
53	円筒 E1			16.1	15.0						
54	円筒 E1			14.4	15.0						
55	円筒 E1			(13.3)	14.0						
56	円筒 E2			14.6	15.0	11.6					
57	円筒 E2			13.7	14.4	11.3					
58	円筒 E2			12.6	14.6						
59	円筒 E2			(14.7)	17.8						

番号	器種	口径	器高	底径	単位(cm)			単位(%)					
					第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径		
60	円筒 E2			13.7	15.2								
61	円筒 E2			15.1	13.7								
62	円筒 E2			13.8	14.7								
63	円筒 E3			14.2	14.5	12.4							
64	円筒 E3			14.5	13.8	12.4							
65	円筒 E2			(15.4)	15.3								
66	円筒 E3 (22.3)	41.0		13.6	14.4	11.4	15.2	35.1	37.1	54.4		61.0	
67	円筒 E3	22.6	42.4	14.5	15.1	12.0	15.3	35.6	36.1	53.3		64.2	
68	円筒 E3 (24.5)					12.2	16.5						
69	円筒 E3			13.3	14.5	12.3							
70	円筒 E4	25.6	43.5	15.0	15.1	11.9	16.5	34.7	37.9	58.9		58.6	
71	円筒 E4			13.9	13.6	12.3							
72	円筒 E3	23.6											
73	円筒 E3			13.7	13.1								
74	円筒 E2			14.3									
75	円筒 F1			15.0	18.2	11.8							
76	円筒 F1			(17.6)	17.4	12.5							
77	円筒 F1			15.5	17.0								
78	円筒 F1			16.8	17.9								
79	円筒 F2			(15.3)	18.0								
80	円筒 F2			15.8	17.8								
81	円筒 E3			(14.2)	15.5								
82	円筒 E3			13.8	14.8								
83	円筒 E4			13.3	15.1								
84	円筒 E4			12.6	13.4								
85	円筒 F3	25.5	38.2	14.9	12.8	12.1	13.3	33.5	34.8	66.8		58.4	
86	円筒 G	24.5	37.7	14.4	13.9	10.1	13.7	36.9	36.3	65.0		58.8	
87	円筒 H	25.6	39.0	14.6	13.3	11.4	14.3	34.1	36.7	65.6		57.0	
88	円筒 F3			15.1	12.9	11.7							
89	円筒 G (23.9)						11.1						
90	円筒	(23.8)											
91	円筒 H			13.0	13.3								
92	円筒 G			12.5	13.6	10.5							
93	円筒 J	24.6	41.5	15.5	13.2	11.1	17.2	31.8	41.4	59.3		63.0	
94	円筒 J (25.0)			38.5	14.2	12.4	12.4	13.7	32.2	35.6	64.9	56.8	
95	朝顔 A2	37.0	58.8	12.6	13.5	11.8	8.9	23.0	15.1	62.9		34.1	
97	朝顔 C1	37.0											
99	朝顔 A2			14.8	14.0	12.5	9.1						
100	朝顔 C1			(13.8)	13.1	12.3							
101	朝顔 A1			15.4	15.9								
102	朝顔 C2			13.6	13.2	11.9							
103	朝顔 D1			15.5	14.2	11.7	9.7						
104	朝顔 D1			(14.7)	15.9	11.2							
105	朝顔 D1												
106	朝顔 D1			(14.0)	14.7	12.0							
107	円筒 K						13.9						
108	円筒 K						13.5						

第61号填出土輪計測表 (第135図)

番号	器種	口径	器高	底径	単位(cm)			単位(%)					
					第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径		
4	円筒 A1	23.8					14.1						
5	円筒 A2 (24.4)						12.8						
6	円筒 A2			(13.1)									
8	朝顔 A1	39.9											

第63号填出土輪計測表 (第146・147・149図)

番号	器種	口径	器高	底径	単位(cm)			単位(%)					
					第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径		
16	円筒 B (25.8)	37.5	(12.7)	12.6	11.0	13.9	33.6	37.1	68.8	49.2			
17	円筒 A3 (25.0)	37.5	(12.7)	13.2	10.9	13.4	35.2	35.7	66.7	50.8			

單位 (cm)											單位 (%)	
番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径	
18	円筒	C	26.0	38.2	13.1	12.7	11.6	13.9	33.2	36.4	68.1	50.4
20	円筒	A1	25.9					18.0				
21	円筒	A2	(24.0)									
22	円筒	A1	(25.4)									
23	円筒	A1	(24.3)									
24	円筒	A1	24.2									
25	円筒	A2	(24.0)									
26	円筒	A2	(24.7)									
27	円筒	A3	(24.2)									
28	円筒	A3	(24.4)									
29	円筒	A3				11.2						
32	円筒	A2		(13.2)								
33	円筒	E		(12.1)								
34	円筒	A3		11.4								
35	円筒	A3		12.7								
36	円筒	A1		13.0								
37	円筒	A1		15.2								
38	朝顔	A2	34.8									
46	円筒	A3						16.8				

單位 (cm)											單位 (%)	
番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径	
5	円筒	C	(18.3)	(24.3)			10.2	9.9				
6	円筒	A	(26.2)					13.3				
7	円筒	B	(23.8)					9.1				
10	円筒	C		(12.8)	8.1	7.2						
11	円筒	A		13.1	12.1							
12	円筒	A		11.7								
13	円筒	C		12.6								
14	円筒	A		11.4								
15	円筒	A		(13.2)								
16	円筒	A		(13.2)								
17	円筒	A		(13.9)								
18	円筒			(14.3)								

單位 (cm)											單位 (%)	
番号	器種	口径	器高	底径	第1段幅	第2段幅	第3段幅	1段目/器高	最上段/器高	口径/器高	底径/口径	
5	円筒	A	(26.7)	36.5	12.9	13.0	10.0	13.5	35.6	37.0	73.2	48.3
6	円筒	B	(23.1)	36.7	11.9	13.8	10.5	12.4	37.6	33.8	62.9	51.5
7	円筒	C		(11.9)	13.6	8.6						
8	円筒	A		12.4	15.0							
9	円筒	A	(26.6)									

VIII 調査の成果と課題 I

1. 先石器時代のまとめと成果

新屋敷遺跡は大宮台地の北東部に位置し、現状で三角形に台地部が確認されている地域である。本地域の先石器時代の資料は、新屋敷遺跡に隣接する生田塚遺跡の1976年調査でナイフ形石器1点が検出されたのをはじめに、1985・86年に中三谷遺跡から石器集中2箇所が検出されている。中三谷遺跡と新屋敷遺跡の距離は約0.7kmの位置にあり、石器群の編年の主体は共に岩宿II期であるが、ナイフ形石器等の形態や組成内容に大きな違いがみられ、同時期内における段階差を示しているものと思われる。

(1) 概要と地形

新屋敷遺跡の調査で、先石器時代の遺構及び遺物が検出されたのは、1986年に鴻巣市教育委員会が実施した第1次調査と、当理文事業団が1993～1995年に実施したC・D区の調査範囲からである。

複数回の調査によって確認された石器集中と礫群の位置関係及び、単独石器の出土地点、第183・185図の概念図に示した。それを見ると、現状の地形では平坦にみえる当該地域であるが、黒色土を埋土とする大形の窪みが2箇所検出され、埋没谷があったと考えられる。埋没谷の開口方向は北方向と東方向に向かっており、調査区は2つの谷が近接する分水嶺のような状況であったと考えられ、先石器時代の景観は現在と大きく異なっていたことが想定できる。

確認された埋没谷と石器集中、礫群及び単独石器の地点の関係をみると、北方向を向く谷頭を囲む様に岩宿II期の石器集中9箇所と礫群17基が幾つかのグループを形成している。尖頭器及び他時期のナイフ形石器は東方向の谷頭の南側に石器集中1箇所が検出されている以外は、岩宿II期の分布と一部重複しながら、広範囲に散漫に出土している。

(2) 岩宿II期の石器群について

C区とD区は調査年度によって便宜的に区分されているが、実際は調査区が隣接しており、同じ埋没谷を囲む石器集中と礫群である。石器集中の数は9箇所、礫群は17基が検出されている。石器集中と礫群は分布的に密接な関係がみられ、幾つかのまとまりがみられる。グルーピングに関しては、C区報告、D区報告でそれぞれ便宜的に行っているため、名称等の整合性がとれていない。そこで、再度C・D区を併せた形でグルーピングすると下記ようになる。

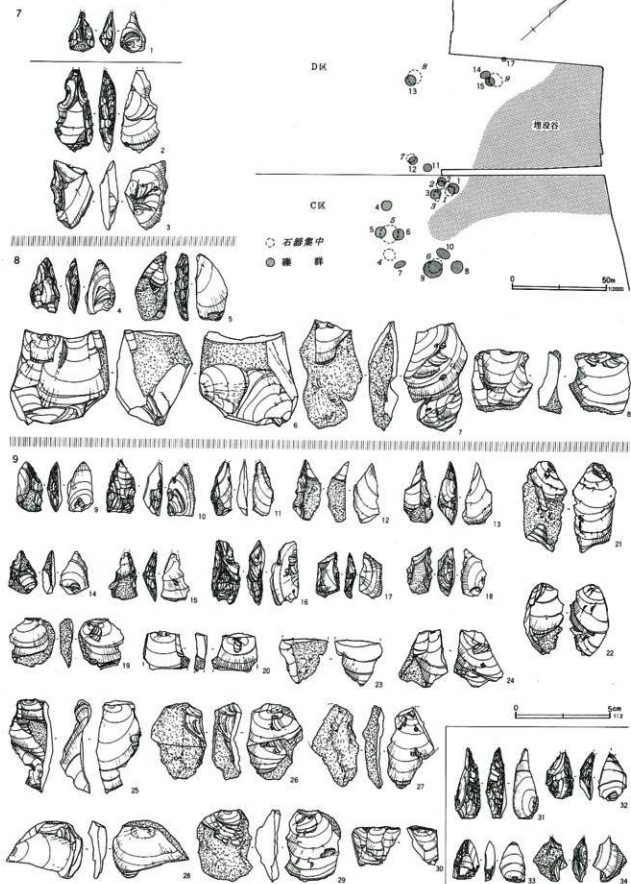
・グループa：埋没谷の西側に位置し、石器集中9を中心と礫群14～17の石器集中1箇所と礫群4基で構成される。石器点数は集中内から90点で、周辺の礫群及び単独を合わせると100点前後になる。D区では中心的な石器集中で、ナイフ形石器13点以上、掻・削器2点、ドリル2点と磨石がまとまっている。

・グループb：埋没谷のラインから西側に約50m離れたところに位置する。グループの内容は、石器集中8と礫群13で石器集中1箇所、礫群1基の小規模な構成である。石器の数は76点出土しているが、器種はナイフ形石器2点と、新屋敷遺跡では少ない敲石が1点出土している。

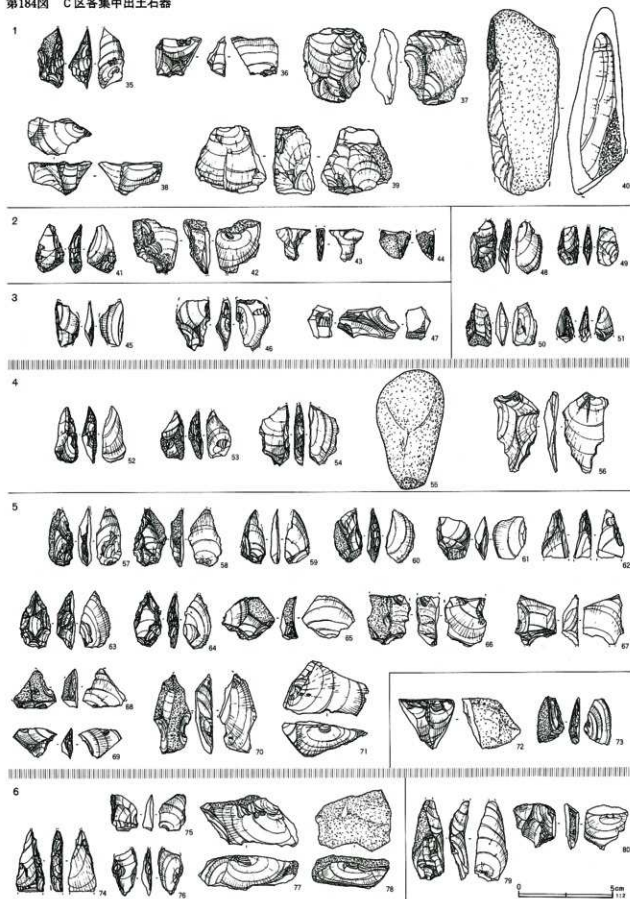
・グループc：埋没谷の谷頭の西側に位置し、C区とD区の調査区をまたがるように分布している。石器集中は1～3・7の4箇所、礫群は1～3・11・12の5基で構成されている。石器の総数は300点近く、最大規模のグループであるが、碎片の占める割合が高く、製品はナイフ形石器と掻・削器が数点、角錐状石器と磨石、敲石等が検出されている。また、42はC区報告で突起部に言及したが掻・削器に分類した。D区第14図25・26の資料を検討する限り同じ器種とした方が妥当であると考え、以下ドリルとして検討する。

・グループd：谷頭の最も奥まった位置から検出され

第183图 D区各集中出土石器



第184图 C区各集中出土石器



ている。石器集中4・5の2箇所と礫群4～7の4基で構成されている。石器の総数は約200点を数え、ナイフ形石器が10点とまとまっており、他に角錐状石器が2点、敲石等が検出されている。

・グループe：谷頭の東側に位置する礫群のまとまりに、石器集中が含まれるように検出された。石器の点数は約50点と少なく、器種はナイフ形石器4点と挿・削器が検出されている。

以上、各グループの概要を整理した。次にグループの分布状況を見ると、谷頭を囲むようにグループc～eは近接し、礫群は連続しているようにみえる。一方、谷の東側には石器集中及び礫群の分布が広がらず、西側は谷のラインに沿って、約40mの間隔でグループa～cが並んでいる。それを、石器集中の規模と合わせると、最北東部のグループaと谷頭の最も奥まった位置にあるグループcから、ナイフ形石器を中心とした充実した資料が検出されている。礫群は谷頭を囲む様に密集しており、離れたグループa・bは小礫を中心としたものである。

・各器種の分布状況：次に各グループと石器の分布の状況を整理する。ナイフ形石器は石器の事実記載の部分で、先端が尖り基部が比較的丸くなるものをa類、台形状になり刃部が幅狭で器軸に直交するものをb類の2つに大別した。これは、C区報告書の結語でナイフ形石器と切出形石器の検討を行ったが、ナイフ形石器がa類、切出形石器がb類にはば対比される。この分類にそって、各グループのナイフ形石器を見ると、a類はグループaとグループdに集中する傾向がみられ、b類は点数は少ないが一定の石器集中に偏在しないで、各グループから検出されている。

角錐状石器は4点と少なく、グループcとグループdから検出されている。

磨石はグループa・c・eにまとまる傾向がみられる。

ドリルはグループa・cから検出されている。

(3) 岩宿II期石器群の編年の位置づけ

C区の報告書の結語で、新屋敷遺跡と明花向遺跡C区IV層、大和田高明遺跡の石器群を比較して検討した。明花向遺跡の編年の位置づけは、砂川期の前後で各研究者の間で意見の分かれるところであるが、新屋敷遺跡との比較検討から、砂川期以前に位置づける方が妥当であると考えられる。また、1997年に報告した滝の宮坂遺跡の資料を追加することで、大宮台地に特徴的にみられる石器群と考えられ、今後一層の検討が必要であると痛感する。

次に、岩宿II期の中での編年の位置づけであるが、該期は多様な形態のナイフ形石器・切出形石器がみられる(組成する)時期と認識されているが、この多様な石器群を、段階細分として捉えられるのか、時期差とすべきではなく、遺跡差として捉えるべきかで、考え方の相違がある。筆者は段階差として整理する方向で考えている。その立場で、C区報告書の結語とシンポジウム「AT降灰以降のナイフ形石器文化」の発表要旨である「石器文化研究」5号の「V～IV下層段階の細分」で編年試案を呈示したが、この時点では、基部加工のナイフ形石器の一群との関係で、考えがまとまらない状態であったため、第III段階を雑多とし、第IV段階を基部加工のナイフ形石器の段階として一応位置づけた。その為、新屋敷遺跡の石器群を第III段階(V～IV下層段階を4段階に区分し、第I期をV層：殿山期とし、第II～IV期を岩宿II期の細分段階とした。よって第III段階は岩宿II期の中段階になる)に位置づけた。しかし、大宮台地・下総台地が編年表が空白になってしまい、問題があると意識していた。シンポジウムで須藤氏が明花向遺跡を男女倉遺跡との関係から岩宿II期最終段階、砂川期直前に位置づける考えを展開しており、筆者も基本的にその考え方に納得できることから、現在は新屋敷遺跡のナイフ形石器と、基部加工のナイフ形石器を段階差ではなく、それ以外(系統差等)として捉えた方が、より岩宿II期から砂川期への変遷を説明できると考えている。